

# ラリグラス・ジャパン 2012 春レポート

ネパール・インドの女性と子どもの未来のために

2012年6月

特定非営利活動法人

ラリグラス・ジャパン (LJ)

〒108-0072 東京都港区白金 3-10-21

TEL&FAX:03-3446-2193

E-mail:info@laligurans.org <http://www.laligurans.org>

# 目次

はじめに .....	1
現地報告 .....	2
マイティ・ネパール本部.....	2
カトマンズ・新ホスピス.....	6
カカルビッタ・トランジット・ホーム.....	14
サッチガッタ・メンタルケア施設.....	15
レスキュー・ファンデーション.....	19
記録映画と DVD 制作.....	28
ネパール障がい者女性協会（NDWS）.....	31
イベント・その他の活動（2011 年 10 月～2012 年 3 月）.....	34
会員・寄付者リスト.....	39
【会員】 .....	39
【寄付をしてくださった皆さま】 .....	40
【書籍購入にご協力いただいた皆さま】 .....	40
【ボランティアとして活動に参加してくださった皆さま】 .....	40
【活動にご協力くださった皆さま】 .....	40
【理事・役員】 .....	41

## はじめに

ラリグラス・ジャパンが南アジアの人身売買問題に取り組みを始めて、今年で15年目を迎えました。長いようで、あっという間の歳月に感じます。

現地訪問を始めたばかりの頃、マイティ・ネパールは実に小さな団体でした。

慢性的な資金難に頭を痛めながらも、精力的に活動するアヌラダ・コイララさんの姿を今も鮮明に記憶しています。

レスキュー・ファンデーションもまた同様に、小さな一歩からスタートして以来、素晴らしい活動を着々と続けてきました。

そんなマイティ・ネパールとレスキュー・ファンデーションは、今年で設立19周年を迎えます。

ラリグラスは、このふたつの団体の活動の足跡を広くPRするため、この度、記録映画とDVDの制作を決定しました。そのため、代表理事・長谷川は、恒例の現地調査と打ち合わせ等に加え、カメラマンに同行いただき、ネパールとインドを撮影してまいりました。

本レポートにて、このふたつのミッションを通して知り得た現地の最新情報をご報告いたします。

特定非営利活動法人

ラリグラス・ジャパン

## 現地報告

### マイティ・ネパール本部

#### 【マイティ・ネパール本部】

●昨年に続き、今回の訪問時もちょうどネパールの全学校で実施される学期末テスト(進級テスト)と SLC 試験が終了したところだった。これまでも何度かお伝えしているが、学期末のテストは、全科目をパスしなくては進級できないという非常に重要なものだ。そのため、テスト期間中の子どもたちは、学校の先生だけでなく、寮母さんをはじめとするマイティ・ネパールのスタッフからもプレッシャーをかけられ続けることになる。高学年ともなると、放課後も最低数時間、直前には夜遅くまで試験勉強に勤しむほどだ。

そんな試験から解放され、約 2 週間の春休みが始まったばかりの子どもたちは皆、一様にホッとした表情を見せていた。

●春休み中の 4 月上旬には、毎年、一大イベントが催される。マイティ・ネパールの設立記念を、スタッフと子どもたちみなでお祝いするのだ。この日は、ホスピスに暮らす女性や子どもたちも本部に招かれ、大いに賑わうのである。

今年はマイティ開設から 19 周年。これまでは、子どもたちがダンスや歌、自分で作った詩の朗読などの出し物を発表するのが恒例だったのだが、今年はスタッフが披露する側に、子どもたちは観客になるという趣向だった。

スタッフたちは、それぞれの部署ごと(例えば、テレサ・アカデミーの教師陣や事務所スタッフなど)にチームを作り、余暇を活用して練習を積んできたそうだ。1 カ月以上も前から特訓を重ねた気合いの入ったチームも少なくないとのことである。どのチームも手の込んだ衣装まで準備し、主役の女性ダンサーなどは、当日の朝、美容室でヘアメイクまでしてくるほどの力の入れようだ。

その甲斐あって、ダンス、歌、詩の朗読など、どのチームもなかなか見ごたえのある出し物ばかり。日頃、厳しいスタッフやテレサ・アカデミーの先生たちが、時にはコミカルに、時には情感たっぷりに踊り歌う姿に、子どもたちも盛んに拍手を送っていた。



アマラダさんと副代表のビシュワさんは、カップルダンスを披露。「ひゅ～」と歓声があがる



職業訓練を受け、マイティ本部のヘルパーとなった被害女性たちのチーム。衣装も鮮やかだ



テレサ・アカデミーの先生チーム。妙齢の女性も少女役を。みんな失笑…（失礼！）



法務担当の弁護士も少女役。裁判所での強面とは様子がまったく違います！

しかしながら、子どもたちに感想を聞いてみたところ、「ダンスはダメですね。私たちの方が断然うまい！」とのこと。以前のレポートでもご報告したが、テレサ・アカデミーの子どもたちは、毎夕、ダンス講師を招き、中庭でダンス講習を受けている。中にはプロも顔負けのダンス上手も。技術のレベルが違うのだった。

●来年は、マイティ設立から20周年。節目の年として盛大に祝う予定とのことだ。筆者は10周年という節目の年にも参列させていただいたが、映画界や歌謡界、王室などからも来賓があり、その模様を現地メディアが報道してくれたおかげで、マイティの活動が広くPRされた。来年も同様にたくさん参列者で賑わうことだろう。

1997年から支援を開始したラリグラスは、マイ

ティにとってもっとも古いドナーである。この15年間、実に多くの出来事があったが、マイティの活動がここまで広く認知されることになったことはとても感慨深く、その一助を担えたことをうれしく思う。ひとえに長年にわたり、当会の活動を支えてくださった関係各位のおかげだ。マイティ開設20周年を前に、改めて皆さまに感謝の意を捧げたい。

●訪問時、すべての施設にプレゼントしているお菓子の詰め合わせ600セットを、今回もテレサ・アカデミーの年長の少女14名に手伝ってもらった。昨年夏のツアーの際、どれだけ手早く作業を終えられるかタイムを競った。ツアーメンバーとともにたいへん盛り上がったものだが、「あの時の記録を絶対に超えてみせる！」とやる気満々の女の子たち。宣言どおり、多少、雑な仕上がりにあるものの、前回の15分からタイムを1分縮め、14分でクリアしてしまった。次回、夏のスタディツアー時には、ツアー参加者とともに新記録を樹立したい。

お菓子のアイテムは、チョコレートをコーティングしたウエハース、ロリーポップキャンディー、チャウチャウヌードル（ベビースターラーメン風）、ビスケット、フルーティー（紙パックのマンゴージュース）、チーズボールの6点。配布も少女たちが手伝ってくれた。



お菓子、早く配ってください！もう待ちきれません！



やったね、ゲット！

●マイティは、インドやネパール国内の性産業から救出された被害女性たちに、マイティの施設内だけでなく、外部の職業訓練所や地元企業などの協力を仰ぎ、職業訓練を行っている。もっとも成果をあげているのは、ホテルメイドやレストランの厨房、製パン工場などにおけるトレーニングだ。実践的な現場に携わることで、技術に加え、社会生活に必要な知識も身につくため、とても効果的な職業訓練の方法と考えられている。ホテル業務のトレーニング先としては、数年前から5つ星『ホテル・アンナプルナ』が協力してくれていたが、今年から新たに『カトマンズ・ホテル』も受け入れに名乗りをあげてくれた。

『カトマンズ・ホテル』は、ツアーの際に寄宿するカトマンズのタメル地区にある。同地区は、たくさんのホテルやレストラン、土産物屋が軒を連ねる旅行者のために開発されたエリアであるが、その先陣をきったのが『カトマンズ・ホテル』であり、ラナ家の邸宅を改築したヘリテイジ・ホテルだ。

そんな素敵なホテルにおいて、メイドのトレーニングを受けた5名の女性が、その仕事ぶりが評価され、就職の機会を与えられたのである。

レポート冒頭の「はじめに」でも触れたが、ラリグラスは来春公開を目標に、人身売買をテーマとした自主製作映画およびDVDを制作する予定だ（詳細は後述）。そのため、今回は現地調査とともにロケも並行して行ったのだが、このホテルで働くマイティの女性たちにもインタビューさせてもらった。

女性たちは皆、一生懸命、そしてとても生き生きと働いていた。現在はまだトレーニングを終えたばかりであるため、給与は月額3,000ルピー程度だが、近い将来、10,000ルピー程度に増額されるとのことだ。昼食やお茶など、まかない食も提供されており、いずれもホテルメイドで、とてもおいしいとのこと。さらに素晴らしいのは、客からのチップをスタッフ全員に分配するシステム取っているという点である。

旅行者向けのエリアであることから、客層は外国人（とくに欧米人）が大半だ。チップ文化を持つ彼らは、ピローマネーをはじめ、サービスを受けるごとにチップを手渡す習慣があるため、1回ごとは些少であっても、積もればなかなかの額になる。なんと、現在でも女性たちの収入は、チップを合わせると月額10,000ルピーを超えている

とのこと。今後、給料がアップすれば、20,000 ルピーは固いとのことだ。すばらしい！

彼女たちの上司であるハウスキーピング部門のマネージャーに話を聞いたところ、「みんなよくがんばってくれている。ホテルとしてもたいへん助かっているし、彼女たちの人生に少しでも役立てることは私にとっても大きな喜びです」と語ってくれた。

この上司、たいへんな好人物であった。勤続40年、ホテルの内部事情に精通しており、何より部下の面倒見のよさに定評があるようだ。女性たちには世間知らずなところがある。過去のレポートでも報告したとおり、素性も知れない男性と恋に落ち、トラブルに発展したことも少なくない。マネージャー氏もその点を心配しているようで、いつも女性たちに気を配ってくれているようだ。いわく、

「朝の出勤時には、必ずミーティングを行います。その時、全員の表情を見るのです。少しでも様子に変化があったら、“何かあれば話して”と伝えます。決して無理に聞き出すことはしませんが、いつでも受け入れる準備があると伝えておくことで、安心感を与えるのです。年頃の女性たちですから、恋愛などもあるでしょう。だから、“好きな人ができたら必ず相談してね。あなたたちをきちんと嫁がせることも私の役目だと思っている”とも伝えてあります。また、彼女たちのセキュリティにも配慮しています。例えば、男性客が彼女たちを呼んだ際、決してひとりではなく、2人組で部屋に入るように指導しています。客の中にはセクハラまがいのことをする人もいるので、気をつけなくてはなりません」

彼のような上司がいてくれれば安心だが、総支配人にも挨拶に赴き、重ねて女性たちのことをお願いしておいた。

●女性たちはとても誇らしそうに働いていた。そのうちのひとりである22歳の女性に、インタビューをさせてもらった。満面の笑顔でベッドメイクの手技を披露してくれる。その過程でいくつかの質問を投げかけてみたのだが、言葉に詰まってしまふばかりだ。カメラを向けられて恥ずかしいということもあるだろう。だが、彼女のあるひと言に、なかなか言葉が出てこない理由がのみ込めた。

「ネパール語はあまりわからないのです。ヒンディー語の方が話しやすいです」

彼女はネパール人だ。だが、母国語であるネパール語は不得手であり、インドの公用語であるヒンディー語の方が得意だというのだ。それが意味することは、母国語を忘れてしまうほど若い頃に、彼女はインドの娼窟に売られたということだ。気の遠くなるような時間を、あの劣悪な環境下に置かれ続けていたのである。

だが、美しい彼女の笑顔からは、そんな過去は到底、想像できない。彼女は確かに再生しつつあるのだ。

「一生懸命働いて、お金を貯めて、いつか自分の美容院を開きたい。結婚はしたいけどまだ先の話です。今は働くことが楽しいから」

彼女のこれからが、人生はやり直せるということを実証するはずだ。そんな彼女の姿が、後輩たちの励みとなってくれればと願っている。

次回、夏のツアーの際、参加者の皆さんとともに、彼女たちの激励に足を運びたいと思う。そして、彼女たちの働きぶりを改めてご報告したい。もちろん映画の中でも彼女を皆さんにご紹介させていただくつもりだ。

### 【新ホスピスの様子】

●テレサ・アカデミー本校では、図画工作や音楽の授業が行われている。放課後には講師を招き、みんなでネパール民謡やインドの映画音楽に合わせてダンスのレッスンも行われている。才能を認められた子は、外部の音楽教室に通うチャンスを与えられ、一昨年までホスピスに暮らしていたマドゥちゃんもそのひとり。この春休み中、タブラ（太鼓）の教室に通わせてもらっているのである。



のんびり楽しい春休みだけれど、お勉強もちゃんとやります。

ところが、ホスピスに開設される分校では、図画工作や音楽の類の授業は行われていない。算数、国語、英語、理科、社会と、進級試験科目のみを勉強する毎日だ。しかも、ネパールの授業は暗記が中心。そんな詰め込み学習にやる気が起きず、明らかに勉強嫌いと思われる子どもも少なくない。まったく勉強に身が入らず、落第を繰り返す子までいるのだ。

「授業が楽しい」という感覚を育むには、音楽や図画工作といった楽しみながら学べる授業が必要であろう。そこで前回訪問時、マイティ・ネパール代表アヌラダ・コイララさんに、図画工作をカリキュラムに取り入れてもらえるよう要請したところ、早速、動いてくれた。間もなくして、週1回、本校から絵の先生が出張授業に赴いてくれるようになったのだ。加えて、ダンスの授業も定期的に行ってくれているらしい。



クローバーの花で冠を作ってくれました。

●子どもたちは、とても楽しく学んでいるようだ。その証拠に、筆者が到着するや否や、「アンティ、私たちのダンス、観たい？」との声がかかった。「うん、観たい！」と答えると、場は瞬時にダンスの舞台に。女の子チーム、男の子チーム、男女混合チームに分かれ、ネパールのフォークダンスや、インド映画のクネクネダンスを披露してくれる。まだ習い始めたばかりであるため、レベル的には本部の子どもたちに到底及ばないものの、本当に楽しそうに歌い、踊るのだった。



女の子チームが披露してくれたダンス。とっても愛らしい。



男の子チームのダンス。インド映画のヒーロー気分です！



低学年の男女混合チームのダンス。ダンスというよりお遊戯といった雰囲気だ。

ダンスに続いて、男の子たちがコメディを披露してくれた。なんでも、ラジオのコメディ番組を聴いて暗記したそうだ。

「これからジョークを言います！ 隣の家に塀ができたんだってね。へ～」

大半はこんなかんじのジョークだが、中にはそこそこ笑えるネタも。ディパックくんなどは、間の取り方が絶妙であり、素質ありとみた。

ツアーの際、ラリグラスのメンバーは仮装して手品を披露する。ホスピスの女性や子供たちは、いつも観客の側だ。だが、次のツアーでは、子どもたちもダンスやジョークを発表してくれるという。ラリグラス・チームも負けてはいられない。

●進級試験に失敗し、落第を繰り返していた、ターシーとニーラム、マニーシャ。今年の試験の出来はどうかと案じていたが、3人とも無事にパスし

たとのこと。ホッと胸を撫で下ろしたものだが、残念ながらディパック(8歳)という男の子が落第してしまった。

この結果の背景には、驚くべきストーリーがある。昨年10月初旬、このディパックとターシーが脱走を図ったのだ。

この発端は、授業になかなか身が入らない彼らを、女性教師がひどく叱ったことにある。いくら諭しても言うことを聞かない彼らに、つい手を上げてしまったのだ。

ふたりはこれに怒った。チャンスを窺い、ホスピスから抜け出したのである。施設は高い塀に囲まれ、最上部には有刺鉄線が張られている。正門も固く閉じられ、門番が人の出入りに目を光らせている。女性ばかりの施設であるため、厳重なセキュリティが敷かれているのだ。

ならば、ふたりはどうやって脱走したのか。実は、一か所だけ外に出られる場所がある。ホスピスでは、裏手の塀の外側で牛やヤギを飼育しているのだが、そこに通じる小さな扉があるのだ。

女性やスタッフの目を交わすため、畑仕事や調理などで忙しくしている時間帯を狙って外に出たふたりは、一気に田んぼ道を駆け抜けた。目指すはマイティ本部。教師の暴力をアヌラダさんに直談判することが目的だった。

ふたりの姿が見えないことに気付いたホスピスでは、たいへんな騒ぎになったという。誘拐されたのか。どこかに落ちてしまったのか。スタッフは辺り一帯を必死に探しまわり、女性たちも気がでなかったという。通報を受けたマイティ本部でも大ごとになったそうだ。

ホスピスの子どもたちに外出する機会はほとんどない。マイティ本部の項に記したようなイベントの際、本部が迎えによこしたマイクロバスで年に1~2回、出かけるぐらいだ。スタディツアーの際は、レストランや映画館に足を運ぶが、マイティ本部へのルートとは異なる。決して通り慣れた道のりではないのだ。

だが、彼らはかすかな記憶を頼りに歩を進めた。地図で確認したところ7kmもあり、10歳未満の子どもの足にはたいへんな道程である。それでも彼らは何時間もかけて、マイティ本部へとたどり着いた。そして門番に、「デジャー(アヌラダさんの敬称)に会いたい！」と訴えたという。

ふたりを迎え入れたアヌラダさんは、頭ごなし

に叱ることなく、彼らの話に耳を傾けることから始めたようだ。そして、教師の暴力を知り、即、その女性教師を解雇したとのことである。彼らの気持ちを汲んでくれたアヌラダさんの計らいに感謝である。

ホスピスのスタッフによれば、この女性教師はヒステリックなところがあり、子どもたちはみんな委縮していたという。だが、反抗することもできず、ぐっところえていたらしい。そんな状態に我慢がならず、奮起したのがディパックとターシーなのだった。

もし迷子になっていたら、今頃、どうなっていたかと想像するとゾッとする。だが、子どもの頃から、どんないつけもきちんと守り、従順であるばかりがよい子というわけではない。ふたりの行動は確かに無謀だが、その根本に、一同を代表して不満を訴えねばならないという彼らの気概を感じるのだ。実に頼もしく、勇気ある子たちではないか。

「私たちには絶対、できない。多少、嫌なことがあっても何もいえない。ディジュに直談判するなんて、想像するだけで震えてしまいます」

ホスピスの女性たちも、苦笑しつつも、ふたりの勇気に感心していたものだ。

「怖くなかった？ 泣かなかった？ 道、わかったの？」

そう尋ねると、ターシーは「ちょっと怖かった。でも泣かなかった」と答えた。ディパックは、「道はちょっとわからなくなった。だから人に聞きながら歩いていった」とのことである。

筆者の質問に答えながら、ふたりの表情は次第に強張っていった。脱走事件の後、ホスピスの寮母さんや看護師、女性たちにこっぴどく叱られたようだ。きっともう一度、雷が落とされるのでは……と思ったのだろう。

もちろん、「外には悪い人もいるし、交通事故の危険もある。なにより、知らない間にいなくなってしまうらみんなが心配するから、これからはまずホスピスのスタッフやおねえさんたちに相談してね。黙っていなくなっちゃダメだよ」と注意はしたが、一方で大冒険を成し遂げた勇気を褒めずにはいられなかった。

「でも、本当によくがんばったねえ。泣かなくてえらかったねえ」

頭を撫でられ、気まずさと誇らしさ半々の表情を浮かべるふたりだった。

●脱走事件が起こる前、確かにディパックは学習意欲に欠け、反抗的な態度を見せることもしばしばだった。スタッフの話によれば、ホスピスの生活に馴染みきれていない様子だったという。

ディパックの両親はAIDSを患い、すでに他界している。5歳で孤児となった彼は、親戚によってマイティに預けられた。だが、幼い彼には自分の置かれている状態を100パーセント受け入れることができなかった。両親が健在だった頃の幸福な記憶を消し去ることができず、実家が恋しくてたまらなかったのだと思う。

「どうして僕はここで暮らさなくてはならないのか。自分の家に帰りたい」

そんな思いが、彼を反抗的にさせ、ホスピスの生活に溶け込みきれない理由だったに違いない。

脱走事件から間もなく、ダサインの休暇があった。その際、アヌラダさんはディパックを一時、里帰りさせたという。といっても、そこに両親の姿はなく、伯父夫婦とその子どもたちが生活する家だ。

ディパックは、もうホスピスには戻らないつもりだったらしい。だが、ほどなくして、自らホスピスに帰りたいと言い出したという。スタッフの話によれば、伯父夫婦の家で彼はほとんど世話をしてもらえなかったそうだ。平たくいえば、厄介者としてしか扱われなかったということである。

ディパックの生まれた家は貧しい。伯父夫婦もまた、日々の糧を得るだけで精一杯の暮らしであり、甥の養育を引きうけるだけの余裕などないと思われる。

思い焦がれた故郷がもうそこには存在しないことを悟ったディパックは、「自分の生きる場はホスピスしかない」と、覚悟したのだろう。ホスピスに戻った彼は、明らかに以前とは違う表情を見せるようになった。もとは口数の少ない子だったが、笑顔も言葉数も格段に増えた。前述のジョークのレベルもいちばん高いのは彼である。そこに自ら環境に馴染もうとする前向きな姿がうかがえるようだった。

進級試験に失敗した原因は、こういった経緯があり、十分な学習ができなかったからだ。故郷を失い、落第をしてしまい、ショックは大きかったと思う。だが、気骨ある彼ならきっと、他の子どもたちとともに、元気に成長していつくれることと信じている。



おやつ時間。果物を毎日、食べてビタミン補給しています。

●今回、記録映画の撮影のため、何人かの子どもたちのインタビューをとらせてもらった。カメラを向けられ、多少の恥ずかしさはあるものの、それでも楽しそうにいろいろな話を聞かせてくれた。そこで改めてわかったことは、子どもたちは実に鮮明にラリグラスのメンバーとの思い出を覚えているということだ。とくに、もっとも長くホスピスで暮らすアーシャ（拙著『少女売買』に登場するアプサラの娘）などは、3歳頃からの出来事を事細かく記憶しているのだった。

『少女売買』の取材のために、アプサラとアーシャと一緒に車でアプサラの実家を訪ねた時の話。3歳の誕生日にツアーメンバーとお祝いした時の話。本当にたくさんの私たちと過ごした時間を大切にしてくれているのだった。

ホスピスで暮らす子どもたちの大半は、ディパックのようなエイズ孤児だ。以前、お知らせした『新潮45』の記事にあるように、アーシャの母、アプサラもういない。

子どもは、いかに自分が愛されているかを感じることによって自信をつけ、己の存在価値を確認していくものだと思う。本来、その役割は親が担うものだろうが、彼らには親がない。自分を愛してくれる絶対的な存在を持ち得ていないのだ。

マイティのスタッフも、ホスピスで暮らす女性たちも、そして私たちラリグラスも、彼らの親にはなれない。だが、彼らに愛情を注ぐことはできる。それを子どもたちが生きる糧としてくれればと願う。

ラリグラスは年2回しか訪問できないが、遠く離れている間も私たちが子どもたちを思い、ずっと

味方であることを彼らが信じ続けられるだけの、密度の濃い時間を過ごしたいと思う。

●女性も子どもたちも、閉鎖的なホスピスの中で単調な生活を送っている。とくに、職業訓練や仕事などで外出の機会がある女性たちに比べ、家庭生活も学校生活もすべてホスピスの敷地内で営まれる子どもたちは、一般社会に触れる機会はさらに少ない。

ART治療を開始してから、みんな健康状態は良好だ。今後、医療はさらに進歩するはずであり、子どもたちはきっと無事に成人し、社会へと羽ばたいていってくれると信じている。

だが、そうなった時、障害になるのは、彼らの幼少期における経験があまりにも少ないという点だ。一般的な社会生活に疎いまま、大人になってしまっただけでは、何かと支障があるのではと案じるのである。

子どもは経験を通してさまざまを学ぶものだ。そのため、ひとつでも多くの経験を重ねる機会を提供しようと、ツアー時には映画観賞やレストランでの食事、ランチパーティーなどのプログラムを実施してきた。

だが、春季のような現地訪問の際は、この手の大掛かりなイベントを催すことは難しい。なにかいいアイデアはないものかと思案したところ、ひとつのプランを思いついた。それは、「はじめてのお買い物計画」である。

ホスピスの子どもたちには、衣類、文具、おやつなどのすべてが支給されている。そのため、彼らはこれまで自分たちで買い物をしたことがない。

かつてプロ野球カード付きスナックやくじ付き飴など、限られたお小遣いをやりくりし、駄菓子屋で買い食いするのが楽しみだった方も多かっただろう。ネパールでもお小遣いを手にお菓子を買って求める子どもの姿を見かける。「自分の好きなものを買う」という行為は、子どもたちの夢であり、喜びなのだ。

それを経験させてはどうか。楽しいのはもちろん、実際に買い物をすることで、お金というものの実態を、身をもって感じることもできるのだ。

アヌラダさんに打診したところ、賛同をいただき、早速、実践することに。子どもたちに計画を話すと、とたんに瞳をキラキラと輝かせ始めた。ひとり20ルピーを支給すると、早速、プレゼントのきんちゃく袋（後の記述を参照）に入れ、なん

と大急ぎでお出かけ用の洋服に着替え出した。

「アンティ、これでいい？」

ランジットという男の子が、いちばんお気に入りの服を見せにくる。

「私はこの服を着て行く。お土産にもらった髪飾り（後述）もつけていく」

女の子たちも次々に、自分のコーディネートを見せに来てくれる。

お出かけといっても、徒歩15分ほどの表通りにある小さな雑貨店なのだが、それだけでも大騒ぎだ。いかに外の世界への関心が強いかということである。

そして、ふたりひと組、手をつなぎ、一列になってはじめてのお買い物に出発したのだった。



はじめてのお買い物。店先は大賑わい。異常な熱気で盛り上がった！

●雑貨屋の店先は大騒ぎとなった。店のおばさんに向かって、15名の子どもたちが一斉に声を上げるのだ。

「そのビスケット見せて！ 違う！ それじゃない！ 隣の赤いヤツ！」

「この飴、いくら？ こっちのガムは？」

最初に買い物を済ませたのは、年少さんの男の子。ホスピスでは滅多に口にすることのないチョコパイ（森永エンゼルパイ風）を手に、店のおばさんをじっと見つめている。てんでこまいのおばさんは、彼から20ルピーを奪い取る。これで彼の買い物は終了となり、その後は他の子どもたちの様子をじっとみつめていた。

年長の男の子はさすがだ。まずはひとつひとつの値段をリサーチし、計画を練っている。そして、最終的に10ルピーのビスケット、5ルピーのスナック、5ルピーの飴と3点をゲットした。

それを見た先の年少さんの顔が曇った。自分は1個。しかし先輩は3個。なんだか損した気分。泣きそうだ。そして彼は、ごった返す中、おばさんに向かって声を張り上げた。

「これ、やめたい！」

彼はチョコパイを返品し、先輩同様、ビスケット、スナック、飴の3点を手にしたのだった。

帰り道、子どもたちが各々の戦利品を見せてくれた。「どういう品を買ったか」というよりも、「何個、買ったか」にポイントがあるらしい。最高点数は4点買いの女の子。質より量の子どもたちなのだった。



「どれにしようかな…」 「これもおいしそう、あれもおいしそう…」と、真剣な眼差しの子どもたち。

お金の使い方がわからないのではないかと思ったが、みんなきちんと買い物できた。

おつりの額に納得がいかない様子の女の子もいたが（実際は間違っていないのだが）、いずれにしてもこういった経験は大切だ。次回、ツアー時にも実施したいと思う。

### 【子どもたちへの贈り物】

●当会は、現地を訪問する際、私たちが支援する施設の女性や子ども、スタッフたちにプレゼントを用意する。手土産を持参するのは日本の風習でもあるが、ネパールやインドもまた同様に、ちょっとした贈り物を通して親戚縁者や友人とコミュニケーションを図るのだ。

私たちの支援する施設の女性や子どもたちは、私物がとても少ない。ホスピスやマイティ本部に保護される女性たちの場合、ビーズ制作などによって収入を得ているため、身の回り品を買い求め

ることは可能だが、それでも欲しいものを好きにだけ買うほどの経済力はない。子どもたちになると、ネパール最大のお祭り、ダサインの際、20ルピー（約20円）のお年玉が配られる以外、お小遣いをもらう機会はなく、文具やおやつを買うチャンスはない。彼らの私物は、施設からの支給品が大半を占めており、それらが与えられるのもダサインなどのイベント時に限られている。つまり、必要最低限の実用品しか持っていないのだ。

そのため、年2回の当会からのギフトをみんな心待ちにしてくれている。どんなものでも喜んでくれるのだが、どうせなら歓声があがるぐらいのヒットを飛ばしたいと、毎回、品物のチョイスには力を注いでいる。

今回のラリグラスからの贈り物は、現地で調達した。以前にもご報告したが、年々、ネパールと中国の国交は盛んになってきている。それに伴い、市場には中国製物資がたくさん出回るようになり、カトマンズ庶民のショッピングエリア、アサン地区には、中国製品を扱う店が軒を連ね、安価な品物が豊富に並んでいる。50ルピー均一ショップ、100ルピー均一ショップといった日本でもおなじみの均一ショップも人気だ。そういった店には、女性や子どもたちが喜びそうな品々が、所狭しと陳列されているのである。

その中から、女性たちには花モチーフのシュシュ、リップグロス、ネイル、ピアスをチョイスした。おしゃれグッズにはハズレがない。みんなとても喜んでくれた。



女性たちにはおしゃれアイテムをプレゼント。好みのカラーを物色中です。

子どもたちには小型ゲーム（デザインは携帯電話風。液晶画面に見立てた部分がゲームになって

いる。ボタンを押すと水が圧縮され、直径5ミリぐらいの輪が水中を勢いよく泳ぎ回る。それらを2本の棒に入れるという輪投げのようなゲーム。なんと1台たったの80円！）と、女の子には、造花をあしらったヘアピンを、男の子にはディズニーキャラクターのシールをセットした。

日本製のコンピューターゲームと比べればいかにもチャチな代物だが、遊んでみると以外に楽しい。子どもたちも夢中になっていた。



もらった花モチーフの髪飾りを早速、頭に飾る女の子たち。恒例のお菓子の詰め合わせを手に大興奮！



中国製のゲームにみんな夢中！遊び終わった後は包装してあったビニールに丁寧に収納。子どもたちはどんなモノでもとっても大切にする。

●冒頭でご報告したとおり、今回の訪問は、恒例の現地リサーチとミーティングに加え、記録映画とDVD制作のための撮影を兼ねていた。撮影は当会の会員であり、これまでのテレビドキュメンタ

リー制作で、筆者とコンビを組んでくださった柿木カメラマンだ。その奥様である順子さんが、子どもたちに素敵なプレゼントを用意してくださった。

かわいらしい柄のコットン地で手作りされたきんちゃく袋。その一角に動物モチーフなどのワッペンが貼られ、ひとりひとり名前が記せるようになっている。その袋の中に、ペロペロキャンディーやクッピーラムネ、ミルクキャラメルやおかきのスモールパックなどが詰められているというものだ。



順子さんが手作りしてくださった名前入りきんちゃく袋。中には日本のお菓子がいっぱい！

早速、中身を探り始めた子どもたちから、歓声があがった。

「わあ！ ちっちゃな魚だ！」

「あー、私のは入ってない。でもピーナッツは入ってる！」

もっとも関心を集めたのは、おかきのスモールパック。そこに乾燥小魚が入っていたからだ。

みんな魚は大好き。だが、これまでも何度かご報告したとおり、ネパールでは魚は高価な食材であり、施設の食卓にのぼることは皆無だ。そのため、スタディツアーのプログラムのひとつ、ランチパーティーの際、当会が魚を大量に調達し、みんなでご馳走を囲むのだが、そんな貴重な魚に子どもたちは大興奮したのだ。

しかも、ネパールの魚の食べ方は、揚げるかカレーにして食すのが通常。おやつとして食べる習慣はない。それもまた子どもたちを驚かせたようだ。長年、子どもたちと交流を続けてきたが、こんなところにツボがあったとは！

珍しい小魚スナックやキャンディーなど、日本

のお菓子を見つめる女性やスタッフたちも羨ましそうな様子だった。今回は小魚スナックをお土産として持参しようと思う。

ちなみに、「きんちゃく袋に何を入れるの？」と尋ねたところ、全員が口をそろえて「パイサ！」（お金）と答えた。だが、子どもたちはお小遣いももらっていない。入れたくても入れるおカネなど持ち合わせていないのだ。

そこでひらめいたのが、前述の「はじめてのお買い物計画」なのである。

前述のように、子どもたちの私物はとても少ない。「自分の持ち物」が増えることの喜びは、有り余るほどのモノに囲まれて暮らす私たちの想像を遥かに超えるのである。

素敵な贈り物をありがとうございました。

●中野陽子さんからは、美しい絵柄のハンカチをご寄付いただいた。こちらは、マイティのスタッフ、NDWSのスタッフ、レスキュー・ファンデーションのスタッフへの贈り物とさせていただいた。

もともと、ネパールやインドには、ハンカチを持つ習慣がない。男性は1枚の綿生地を、鉢巻や汗ふきなど、ありとあらゆるシーンで活用する。女性の場合も、クルタという民族衣装に合わせて巻くスカーフですべてをまかなっている。

だが、最近、中産階級以上の人たちは、ハンカチを携帯するようになってきた。といっても、もともとハンカチ文化のない国であるから、それほど品物は豊富ではない。かなりダサイデザインのものも数種、売られているだけだ。

日本のハンカチは、まるで一枚の絵のようにきれいなものばかり。みんな「とてもステキ！」と喜んでくれた。

中野さんには、幾度となく温かいお心遣いをいただいている。今回もありがとうございました。

### 【ビーズ・プロジェクト】

●年2回、ツアーを催行していた頃は、参加者の皆さんにデザイン指導と検品を担っていただき、訪問するたびに製品を仕入れることができた。だが、春のツアーを中止して以降、筆者が単身で現地に赴く形となり、スケジュール的にもすべてを検品し、デザインの指導を行うことは難しくなった。また、ビーズ製品は重量があるため、ひとりで全製品を持ち帰ることも困難である。そのため、春

は急を要する製品に絞って仕入れ、夏のツアー時に一括購入するスタイルをとっている。

前回訪問時は、ビーズコースターの大口注文などがあったり、新たにフェルト製の雑貨制作に取り組むなど、アイテム的にも数量的にもこれまで以上に多かった。今回は、これら発注した製品の進捗状況のチェック、素材が十分に足りているかなどを確認した。

ビーズ・プロジェクトのリーダーは、サンティという女性が務めてくれている。以前にもお伝えしたが、もっとも技術が優れているところから、仲間の女性たちの総意で選ばれた。ちなみに、彼女には、ラリグラスから月額1,000ルピー(約1,100円)の給与を支払っている。加えて、彼女が作った製品については、他の女性たちと同じ賃金で買い取っている。結果、他の女性たちに比べて数倍の収入になるが、誰からも文句は出ない。デザイン指導から素材の管理、出来上がった製品の保管に至るまで一手に引き受けてがんばっている彼女には、みんなが一目置いているのである。

そんなサンティに、作業の様子を尋ねてみたところ、前回、新たに発注したフェルト製雑貨に必要な素材が不足しているとのこと。早速、手配した。

次回、夏のツアーの際、これらの新製品を仕入れる予定だ。年最大の国内イベント、グローバルフェスタのブースで、皆さまにご紹介できると思う。お運びいただければ幸いだ。

●当会は、ホスピスに保護される女性たちの収入向上プログラムとして、1998年からビーズ製品づくりの指導を行ってきた。当初の技術レベルはたいへん低く、市場に出せるだけの仕上がりは期待できなかったが、根気よく取り組みを続けた結果、今では国内の各種イベントで販売したり、各地で委託販売していただけるまでになった。

36ページの記述にあるとおり、ビーズ制作は女性たちの唯一の収入源だ。また、自分の製品が市場に認められることは、女性たちの喜びであり、大きな自信にもつながる。今後も継続していかねばならない重要なプロジェクトと考えている。

そんな当会の活動をご理解いただき、「識字教育、職業訓練・収入向上プログラムに役立ててほしい」

と、特定非営利活動法人「世界の人々に教育の機会を与える会 FACE」様より、250,000円のご寄付をいただいた。同団体も長きにわたってネパールを支援されてきた団体だ。

お預かりした支援金は、ビーズ・プロジェクトはじめ、外部の職業訓練施設(編み物、ミシン、染物)でのトレーニングや、施設内での識字教育に活用させていただくことにした。改めて感謝の気持ちをお伝えしたいと思う。

### 【トランジット・ホーム】

●東ネパール・ジャパ郡カカルピッタのトランジット・ホームを訪問。この地はタライ平野に位置するが、3月頃から気温が上昇し、すでに真夏といってもよいほどの気候である。

日中気温は30度を超え、日差しもかなり強いが、乾季であるため空気はカラリと乾いて心地よく、豊かに育った農作物や草花の鮮やかな色彩が美しい。

そんな自然豊かで長閑な雰囲気のカカルピッタだが、凶悪事件が発生した。

同地に到着した日の前夜、カカルピッタ近くの農村でネパール人男性が殺害されたのだ。彼は、ネパールの人身売買問題を精力的に取材していた地元紙のジャーナリストだった。犯行は、彼の記事に不利益を被るマフィアの仕業と見られている。

●人身売買犯罪を水際で防ぐため、マイティはトランジット・ホーム開設時から国境にスタッフを配し、独自で見張り業務を継続してきた。近年は警察も力を注ぎ始め、昨年春にはアームド・ポリス（武装警察）が国境警備を担うようになった。武器をはじめとする異法物資の密輸を摘発することが主目的ではあるが、人身売買犯罪の予防にも協力的だ。

ジャーナリストのペンの力も人身売買の実態を広く知らしめ、犯罪予防に貢献したといえる。マイティをはじめ、越境人身売買に取り組む現地NGOや警察、メディアの力が三位一体となって尽力し、大きな成果をあげたのだ。

筆者がスタディツアーの引率を開始したのは1998年のことだ。以来、必ず年2回、トランジット・ホームを訪問しているが、そこには常に人身売買される寸前で保護された少女たちが滞在していた。ところが、今回はひとりも保護されていなかったのである。

トランジット・ホームの責任者・ゴービンダ氏によれば、彼にとってもこのような状態は15年間で初めてのことらしい。カカルピッタの国境を越えてインドへと連れ去られる被害者数は、確実に減少しているのだ。

事実、マイティはこれまで、人身売買の被害者数を年間7,000名程度と発表していたが、先日、

その数を年間4,000名程度に改めた。

その一方で、アラブ諸国への出稼ぎ者は年々、増加している。ネパール政府の発表によれば、出稼ぎ目的で出国する数は、男女合わせて1日700名にもものぼる。しかし、法律では女性がアラブ方面に出稼ぎに行くことを認めておらず、渡航は違法行為にあたる。そういった背景もあり、アラブへの経由地であるインドで人身売買されたり、あるいはアラブ諸国で犯罪に巻き込まれるという事件が頻発しているが、政府としては何の対策も講じていない。

マイティは、アラブ諸国に少女や女性たちが流出し、危険にさらされることのないよう、近年、新たな取り組みを始めた。国境や空港での監視業務に加え、設立当初から続けてきたアウェアネス・キャンペーン（人身売買犯罪を阻止するための啓蒙活動）によって、危険な手段での出稼ぎがいかにリスクを孕むものかについて訴え、犯罪予防に努めている。

サッチガッタ・メンタルケア施設

【サッチガッタ・メンタルケア施設】

●サッチガッタのメンタルケア施設は、かつてHIV/AIDS 患者が療養するホスピスとして運営されていた。当時、看護師は2名常駐し、ホスピスがカトマンズに移転し、現在のメンタルケア施設となってからも2名の看護師を雇用していた。ところが、重度の統合失調症やうつ病を抱える入所者のケアに音を上げてしまい、1年以上、勤続してくれる看護師になかなか恵まれなかった。結果、近年は看護師1名が15名前後の入所者をケアしなくてはならず、カウンセラー1名、責任者1名、ガードマン兼雑務員2名のスタッフのサポートによって、何とか回している状態だった。

本当によくがんばってくれていたと思う。とくに保護されている女性たちのケアに加え、併設するクリニックの患者も看なくてはならない看護師は、交代要員がいないため、満身に休暇も取れない状態が続き、精神的にも肉体的にも相当な負担がかかっていた。看護師の増員は喫緊の課題であると考え、昨年からマイティに要請を続けてきた。

マイティとしては、地元出身の看護師を雇用する方針だった。カトマンズなどの都市部から、このような辺境の地へ赴任し、24時間体制での勤務を希望する者などまずいないというのが理由だ。だが、地元出身者であれば、休暇の際の帰省も比較的、容易だ。何より、その土地で生まれ育った者であれば、気候や風習に適応しやすいからだ。

さて、地元で求人を行うとなると、担当はトランジット・ホームとメンタルケア施設の責任者を兼務するゴービンダ氏となる。彼は生まれも育ちもカカルビッタ。トランジット・ホーム開設時にマイティのスタッフとなったが、それ以前は公立学校の校長をしていたため、地域には顔が効く。よって、看護師の新規雇用についても、彼に一任していたのである。

ゴービンダ氏は、元来、とても信仰心に厚い人物だ。そこを見込まれ、カカルビッタの責任者としてマイティが招いた。実は、女性を保護する施設では、セクハラが問題になることが少なくない。かつて、トランジット・ホームで雇用していたドライバーも、保護する少女にセクハラ行為を働き、大問題になった。即刻、解雇したが、こういったトラブルはあってはならないことだ。

だが、ゴービンダ氏なら100パーセント安心である。彼なら宗教的に禁忌とされる行為を決して犯すことはない、代表のアヌラダ・コイララさんも信頼を置いている。ところが、仕事能力の面では、正直なところ、物足りないのである。

「ゴービンダは確かに仕事は遅い。でも、私たちのような施設では絶対にあってはならない問題を彼は断固、許さない。それがいちばん大切なことだから大目に見てきたけれど、新しい看護師探しは確かに遅すぎる。」

昨年夏の訪問時、看護師の追加雇用が遅々として進まず、早急な対応を求めた筆者に対し、アヌラダさんはこういったものだ。そして以降、ゴービンダ氏に強いプレッシャーをかけてくれたようである。

その結果、今年1月、新たな看護師が採用されたのだった！

●看護師2名が常駐することになり、交代で休暇を取得することが可能になった。1名が各種の研修に参加することもできる。先輩の看護師は、早速、ヨガのトレーニングを受講したとのことだ。

インドに、ラム・デビさんというヨガの師がいる。10万人で一斉に瞑想したり、がんなどの疾患もヨガで完治させてしまうなど、数々の逸話を持つ超有名人だ。テレビでは毎朝、呼吸法やヨガのポーズ、薬草の効能についてレクチャーする番組が放送され、DVDもたくさん発売されている。ネパールでも絶大な人気があり、彼の道場で学んだ弟子たちが、ネパール各地でミニ道場を開いている。看護師は、カカルビッタ近くで行われたラム・デビさんの弟子のヨガトレーニングに参加したのだ。施設の女性たちの暮らしにヨガを取り入れ、心身の健康を増進することが目的だった。

看護師は早速、女性たちに呼吸法や簡単なポーズの指導を始めた。まだ、取り組みを始めたばかりであり、目立った効果は見られないそうだが、地道に続けていきたいとのことだ。

●ヨガに加え、新たなプログラムとして始められたのが、スピーチ・セラピーだ。みんなの前でひとりひとり、スピーチするというものである。

話題はどんなものでも構わない。人前で自分の考えていることを順序立てて話すこと。それに他

の女性たちから反応が返ってくる。大きな拍手をもらうことなどが女性たちの自信となるようだ。

恥ずかしそうにモジモジしながら話す女性や、潑刺とした声で話す女性などそれぞれだが、みんなとても楽しそうである。



プレゼントされたネイルで早速、おしゃれ。彼女は施設でいちばんのスピーチ好き。選挙演説調の話しっぷりに味がある。



スピーチ・セラピーの様子。サニーちゃん（15歳）も人前で話すのが大好き。紙を丸めてマイクにしてみました。



カウンセラーのイシュワルさんにフォローされて、ジャヌカさんもスピーチ。おしゃべりは不得手だが、精一杯、がんばりました！

施設では、識字教育やダンスの時間、畑仕事や調理など、できるだけ女性たちに担当させている。

“作業療法”という医療的な専門知識からくるものではない。ネパールの精神衛生分野における知識レベルは極めて低く、看護師であっても“作業療法”という言葉さえ知らない。つまり、スタッフたちは女性たちとの関わりの中で、自然にセラピーの方法を編み出したといえるのだ。

こういったプログラムは、大きな成果をあげている。大半の女性の病状が、目に見えて快方に向かっているのだ。こと、以前はまったくコミュニケーションがとれなかったプタリの回復は著しく、女性たちのリーダーとなって家畜の世話や畑仕事に取り組んでいる。前述のスピーチも実に堂々としたものだった。

プタリ本人も、力がついてきたことを自覚しているのだろう。今回訪問時、筆者に対し、盛んに「カトマンズに行きたい。ここはつまらない」と訴えていた。彼女としては、マイティ本部の施設で集団生活できるまでに回復したと感じているのだ。だが、現在も医薬品を手放せない状態にあり、本部での集団生活は依然、難しい段階だ。スタッフとしては、プタリのやる気やプライドを損なうことのないよう、より責任ある仕事を任せるなどして対応していきたいとのことだった。



入所当時に比べ、驚異的な回復をみせたブタリさん。今では施設のリーダー格。スピーチもとても立派なものだった。



最年長のティカデビさん。どんな誘いも最初は「いやだ！」と断るが、最終的には参加。スピーチもばっちり決めてくれた。

●一昨年から夏のツアー時、女性たちとのピクニックが恒例となった。このイベントを心待ちにしている彼女たちは、今回訪問時も“ピクニックに行こう”と盛んに訴えていたのだ。が、筆者と通訳のラジャさんの2名で引率するのは難しい。ツアーの際、参加者の皆様のご協力がなければ、実現不可能なプログラムなのだ。

隣町の病院に月1回、出かける以外に、ほとんど外の世界に触れる機会のない女性たちにとって、ピクニックは年最大のイベントだ。「今回は行かないよ」と答えると、一斉にブーイングがあがったものだが、「4カ月後にはもっとたくさんのお友達と来るから、その時にみんなで行こう」と説明し、なんとか納得してもらった。

女性たちは今この瞬間も、ピクニックの日を心待ちにしていることだろう。大げさではない。彼女たちは、本当にわずかの楽しみしか持ちえないのだ。

夏のツアーは雨期の真ただ中にあり、正直に言えば、ピクニックの実施はそれほど容易なことではない。昨年は未舗装の道路は雨でぬかるみ、チャーターした車両のタイヤがはまって立ち往生。みんなで必死に車体を押して乗り切った。そんな多少の苦勞を伴うピクニックだが、女性たちの満面の笑顔を見ると、なんとしてでも約束を果たさねばならないと思うのだ。少々、早くはあるが、ツアーに参加される皆様にご協力をお願いしたい。

「あなたがうれしいと、私もうれしい」

それがボランティア活動の真髓ではないかと思うのである。



今回のお土産は、リップグロス、ネイル、花モチーフのシュシュ、ピアスの4点セット。カカルビッタとサッチガッタの女性たちやスタッフにプレゼントした。



数種のシュシュの中から好みの色をチョイス。ショートヘアの女性はプレスレットとして活用！



新たに設置されたテーブルと椅子。あぐらを組んで食事するのがネパールのスタイルだが、着席して食事するのが女性たちの間で流行中。

レスキュー・ファンデーション

【レスキュー・ファンデーション】

●1993年に設立されたレスキュー・ファンデーションは、当初、人身売買され、売春宿で強制的に働かされている少女たちの救出・保護に力点をおいて活動していた。だが、被害者を救出すればそれで万事よしというわけではない。彼女たちが社会に帰り、新たな人生を歩み始めてこそ、真の解決といえるのだ。

そのため、レスキュー・ファンデーションは、団体設立の数年後より、海外や国内から支援を仰ぎ、シェルターやリハビリ施設を開設して、教育や職業訓練の機会の提供にも力を注いできた。そしてその活動は、設立19周年を迎えた現在、大きな広がりを見せている。

以前から、救出した女性や少女たちに対し、教育の機会は提供していた。だが、予算に限界があったため、あくまでも読み書き計算など、社会生活において必要最低限の教養について指導する程度に止まっていた。しかし、学齢期にある少女や学習意欲の高い成人女性に対し、より充実した学びの場を提供したいと考え、段階的に教師を増員するなどして教育に力を注いでいった。その結果、今では外部の学校と同レベルの授業を行うまでになったのである。



レスキュー・ファンデーションでは、外部の学校と同レベルの授業が行われている。

インドには、SSCという高校卒業資格試験がある。この春、この試験に5名が挑戦し、全員、見事にパスした。そのうちのひとり、サガンディさん（16歳）は、今後、レスキュー・ファンデーションの支援によってパソコンの学校に通い、さらなる知識を習得する予定だ。



授業のひとつ、コンピューター学習の様子。パソコン操作の技術があれば、就職に有利。



識字教育の時間。レスキューされたばかりの女の子たちが対象だ。学齢期の女の子だけでなく、希望すれば大人の女性も学ぶことが可能。子連れでがんばる女性も目立つ。

「将来はソーシャルワーカーになりたいです。レスキュー・ファンデーションのようなところで働きたい」と、夢を語ってくれた。

人身売買の被害者は貧困家庭の出身者であり、その大半が小学校に通うことさえできない環境にあった。よって、レスキュー・ファンデーションに保護された時点で、自分の名前も書けない少女は少なくない。サガンディさんもまた、文字を読

## 現地報告：レスキュー・ファンデーション

むことも書くこともできなかったが、学ぶことの楽しさを知り、猛勉強を始めた。1年で3年分の科目をマスターするというスピードで知識を吸収していったそうである。他4名のSSCをパスした少女たちも同様だ。

筆者が初めてインドの人身売買問題に関わったのは1994年のことだ。レスキュー・ファンデーションのアクションについては、1996年から追いつけてきた。その長い時間を通して改めて感じるのは、彼らの活動は本物であるということだ。保護する女性や少女たちひとりひとりを幸せに導くべく、個々に応じた細やかなサポートをずっと継続しているのである。

SSCをパスできるまでの教育の機会の提供だけではない。職業訓練もまた、とても実践的だ。訪問する度、新たな訓練科目が加わり、そのすべてが実際に女性たちの収入につながるものばかりである。



SSCに挑戦した5名の女の子たち。精一杯、試験勉強に取り組んだ。

今回の訪問時、新たな収入向上プログラムとして始められていたのが、アクセサリー制作であった。レスキュー・ファンデーションの活動に賛同し、現地のホールセラーが支援を申し出てくれたことから生まれたプロジェクトだ。ホールセラー側が派遣してくれた講師が、本部機能のあるポリバリ（地名）のシェルターにおいて、40名と20名の2つのグループに対し、きめ細かな指導にあたってくれている。作成するアイテムはすべて、海外やインド国内の顧客からオーダーされたアクセサリーであるため、一定の技術レベルをクリアすれば、確実に制作者の収入につながるのである。

訪問時は、1個30ルピーのアクセサリー制作に

取り組んでいた。1日当たり、3つ程度仕上げるができるため、女性たちの収入は1日90ルピーになる。ダイヤモンド風のガラス玉を12個×12個、計144個埋め込む作業もあり、これは1個2.5ルピーの賃金とのことだ。

仕事の受注数には、もちろんアップダウンがあるが、忙しい時はたいへん忙しいらしい。朝8時お祈りと朝食、9時～13時に仕事、13時～14時に昼食、14時～16時に仕事といったスケジュールを、休日の日曜以外、毎日こなしているそうだ。

女性はみんな美しいものが好きだ。レスキュー・ファンデーションの女性たちも、きらきらと輝くアクセサリーが大好き。楽しみながら収入を得られるということで、もっとも人気の高いトレーニングらしい。

講師に話を聞いたところ、アクセサリー制作の重要なポイントは、糊づけの技術とのことだが、7～8カ月のトレーニングを受ければ、マーケットに出せるものが仕上げられるようになるとのことだ。そこまでの技術レベルに達すれば、月額3000ルピー程度の収入を得られるようになるという。

レスキュー・ファンデーションは、女性たちそれぞれの名義の銀行口座を開設している。そこに各々が得た賃金を貯蓄し、施設を退所する際、新生活に役立てられるよう全額持たせるというシステムなのである。



女性たちが制作したアクセサリー。すばらしい技術だ。



こちらも制作中のアクセサリー。花モチーフは人気のデザインだ。

●ムンバイの性産業の実情は、年々、変化している。インド最大かつ最古の赤線地帯といわれるカマティプラも大きく変容しようとしているのだ。

数年前、この地の大規模土地開発が決定した。売春宿が軒を連ねるエリアのすぐ傍に、すでに大型ショッピングセンターがオープンしているが、現在も辺りに近代的なビルの建築が始まっている。間もなくカマティプラにも、大がかりな開発の波が押し寄せる模様だ。

そのため、近年、この界限では、店を閉める売春宿が増えている。現在では全盛期の半数近くになったとのことだ。しかし、彼らは廃業したというわけではない。形を変え、引き続き少女たちに売春を強要しているのだ。

例えば、住宅地の民家を確保し、そこを営業の場とするスタイルが急増している。店と客はインターネットや携帯電話を通じてコンタクトをとるため、看板を掲げる必要はない。要するに、どこで売春が行われているのか見えにくいというわけだ。他、ホテルに女の子を出張させるシステムも急増しているとのことである。

代表のトリベニさんは言う。

「これまで客は売春宿に足を運ばなくてはなりませんでしたが、だから私たちは、売春宿が集まるエリアで内偵を行い、被害者救出に向けての戦略を実行してきました。私たちの闘いの場は明確だったのです。しかし、インターネットや携帯電話が普及した今、客と売春宿側はお互いに顔を合わせなくてもコンタクトできます。ホテルや民家に女の子を派遣すれば、店を構えなくても営業が成り立つのです。それはつまり、この広いムンバイのどこに被害者が隠されているのか、探ることが極めて難しいということなのです。それでも私たちは救出を続けなくてはならない。現在、新たなネットワーク（情報提供者の確保等）を広げていますが、これまで以上にミッションは困難になってくると思います。私たちは新たなチャレンジの時期を迎えたのです」

●このように、性産業のシステムは変化してきているが、従来の形のまま営業を続ける店ももちろん現存する。顧客の多くは底辺社会に生きる男性であり、インターネットや携帯電話とは無縁の者も少なくない。そういった客を受け入れているのが従来の売春宿であり、プーネやデリーなどの古

くからの赤線地帯がそれである。

これらの店に人身売買される少女の数は増加している。カマティプラへの供給が、このふたつのエリアに振り分けられているというわけだ。

詳細は後述するが、今回、映画制作のための撮影をプーネとデリーの赤線地帯で行った。筆者は1994年からデリーやムンバイ、カルカッタを、2007年からプーネの売春宿街の取材を続けているが、確かに昨今、低年齢の少女の姿が増加していると実感した。

また、バングラデシュ出身の被害者の激増も看過できない。バングラデシュもまた、世界最貧国のひとつといわれる国であり、ネパールと同様の手口（職業斡旋を口実に連れ去る）で、多くの人身売買被害が発生している。

インドのウエストベンガル州とバングラデシュの間がオープンボーダーであることが犯罪を助長する原因であることもまた、ネパールと同じだ。

さらなる問題は、バングラデシュ政府は、ネパール以上に人身売買犯罪に無関心であるという点である。

「バングラデシュ政府は、売春宿から救出した少女の帰還を拒みます。返されたところで、面倒をみることができないからです。働き口もなく、政府にはサポートするだけの余力がないからです」と、トリベニさんは言う。

●そのため、レスキュー・ファンデーションの施設には、たくさんのバングラデシュの女性や少女が保護されている。その数は、これまでで最多の50～60名にも上っていた。

それでも先頃、25名の被害者を祖国バングラデシュへと送還した。被害者のひとりが大統領官邸でメイドをしている女性の娘であったため、バングラデシュ政府が動いてくれたからだ。つまり、この送還は特別な力が働いたため実現したのであり、通常、送還にかかる一連の仕事は困難を極めるという。

例えば、送還する女性のひとりひとりのために、2週間有効のトラベルパーミットを作らなくてはならない。パスポートの代わりとなるものだ。それが発行されたら、いよいよ帰国の途につくわけだが、レスキュー・ファンデーションのスタッフは、国境までの引率しか許されていない。そこで相手側の警察に女性たちを委ねるわけだが、先述のように、バングラデシュ政府は彼女たちの帰還

を望んでいない。そのため、引き渡し日時の調整ひとつとっても一筋縄ではいかない。約束した日時を簡単に反故にしてしまったりするのだ。それ以前の問題として、引き渡しのチャンスを整えるだけでも、半年から1年という長時間を要し、書類手続き等も極めて煩雑なのである。

その間、レスキュー・ファンデーションは、女性たちに職業訓練を施し、収入を得る機会を提供している。母国の生活に役立てられるよう、少しでも多くの金銭を持ち帰ってもらうためだ。

「自分の国に帰ったら、ここで勉強したアクセサリー作りのような仕事がしたい」

バングラデシュの女性たちは、皆、前向きな笑顔を見せてくれた。レスキュー・ファンデーションでの暮らしは、とても充実しているという。だが、なかなか帰ることのできない祖国への想いは募るばかりであるのもまた確かなのだった。

●当会が建設費を支援し、その後も運営費をサポートしているリカバリー・ケア・センターには、現在、18名の患者が入院している。その内の12名がHIV/AIDS患者。2名が結核、精神疾患2名、STD（性感染症）2名となっており、2名の女性医師と看護師、ケアテイカー等が常駐し、手厚いケアを行っている。

HIV/AIDS患者の病状を図るCD-4検査は、6カ月に1回のペースで実施されている。ART治療は5名の患者に行っており、彼女たちに関しては、CD-4検査を3カ月に1回のペースで実施している。

ケアセンターでは、現在、ターミナルケアは行っていない。病状が悪化した場合は、提携する近隣（ターネ地区）の病院あるいは国立JJホスピタルなどの、HIV/AIDS治療専門セクションに転院させるシステムになっている。

こちらについても後述するが、これまで筆者はテレビドキュメンタリー制作を通して、ネパールやインドの人身売買問題および、マイティ・ネパールやレスキュー・ファンデーションの活発な取り組みをご紹介してきた。だが、これらの作品の制作過程においては、ケアセンターはまだ開設されていなかったため、同施設については、レポートにおいて状況をご報告するに止まっていた。

今回は、そんなケアセンターの様子も細かく撮影させていただいた。映画では、患者やスタッフのインタビュー等を通して、みなさまにリアルな現状をお伝えできることと思う。



今回のラリグラスからのお土産は、夏用の衣類。本部機能のあるポリバリ、ケアセンターのボイスル、シェルターのあるプーネの3施設の女の子たちにプレゼントした。

### 【レスキュー・ファンデーション・ブライダル基金】

●レスキュー・ファンデーションは、6年前から花嫁を望む男性と保護する女性の縁組を行っている。そのため、ラリグラスは2008年から『ブライダル基金』を設け、嫁入り支度と挙式にかかる費用のカンパを呼び掛けさせてもらっている。

2011年末、新たに5名の女性の縁談がまとまり、ブライダル基金へのご協力を、メーリングリストを通じてお願いさせていただいた。その結果、計157,000円のご支援をいただき、当会のプール金と併せて750,000円を送金することができた。

2012年1月5日、結婚式が盛大に執り行われた。ラリグラスのホームページにも当日の記録写真をアップさせていただいたが、ここで改めてご紹介させていただく。



5名の美しい花嫁さん。ブライダル基金への寄付金は、こういった花嫁衣装購入費に充てられる。



セレモニーでは、施設の女の子たちが重要な役割を担う。



夫の経歴も職業もバッチリ！良縁です。



緊張ぎみの花嫁さん。何回も面接や電話デートを重ねて結婚を決めた。



母親代わりのトリベニさん。娘の晴れ姿に最後は号泣。



晴れの日を迎えてとても幸せ！



お坊さん達の読むマントラに神妙な面持ちの花嫁達。



みんなに注目されてつい俯いてしまう花嫁さん。



レスキュー・ファンデーションを応援するたくさんの方が参列。

ご覧いただくとおり、みんな本当に幸せそうだ。また、ご支援くださったラリグラスの皆さまへの感謝の印として、結婚式の会場にスペシャル・サンクスの横断幕を張ってくださった。

●当会の活動方針は、“現地が必要とすることにより可能な限り応える”というところにある。

“私たちが何をしたいか”ではなく、“現地が何を求めているか”——つまり現場のニーズを汲み取り、それに適切に対応することを活動の基軸に置いている。

売春宿から被害者を救出し、犯人逮捕、裁判、そして被害者を社会に返すという一連の活動には、多大な危険や困難が伴う。そういった活動を 24 時間 365 日、担い続けているのは現場のスタッフたちだ。

人身売買犯罪の背景には、政治家、警察、マフィアなどの組織的な闇が介在する。歴史的、経済的、民族的な事情も色濃く影響している。筆者はインドに 20 年以上関わっているが、未だ不可解な事情が山ほどある。そのようなインドという国の難題に対峙するには、その国の事情に精通した“スペシャリスト”でなくてはならない。

レスキュー・ファンデーションのスタッフは、総じて使命感に燃えるスペシャリストたちだ。私たちがすべきことは、そんな彼らが活動を継続できるようにサポートするところにあると考えている。いふならば、私たちの責務は後方支援にあるのだ。

●当会が行っている施設の運営費支援や結婚費用のカンパといったものは、形としては見えにくい。こういったランニングコストのサポートは、地味な活動形態といえるだろう。よって、敬遠する団体も少なくない。目に見えにくい支援形態は、団体を PR する上で、訴求力に乏しいと考えられがちだからだ。

寄付金や会費によって団体運営が成り立っているという性質上、PR 活動は必要な戦略のひとつであることは確かだ。そのため、実態以上に活動実績を誇大化して PR する団体も存在する。その心情を理解できないわけではない。だが、PR に主眼を置くあまり、実情を歪めてしまってはならない。

支援に派手さや功名の度合は不要であると考えている。ゆえに、当会の活動形態は、平たくいえば地味だ。ご支援いただいている皆さまに、よりわかりやすく達成感や充足感をお届けしたいと思いつつも、前述したとおり、現地のニーズに重きを置いているため、自ずと他の支援団体が関心を持たない分野への支援が中心となる。ネパールにおける精神疾患を抱える女性たちの施設や、NDWS の障がい児施設への支援なども同様の事情

によって、当会が担当しているといえる。

『ブライダル基金プロジェクト』もまた同様の理由によって取り組みを始めたことだが、現地が本当に必要としている支援であることも、また確かなのである。

「人がやらないところこそ、やらねばならない」  
当会の活動方針はそこにあることを、改めてご理解いただければ幸いです。



花嫁が持参する嫁入り道具。ブライダル基金への寄付金が充てられました！

●レスキュー・ファンデーションは、嫁いだ後も、最低 3 年間、“花嫁の実家”として女性の生活を見守る。インドの風習に則り、子どもを授かれば出産時の世話や祝い事も担う。代表のトリベニアチャルヤさんは、施設に保護される少女や女性たちから「マミー」（お母さん）と親しまれているが、まさに実母のごとく親身なケアを行っている。

そんなトリベニさんとともに、2008 年にレスキュー・ファンデーションのアレンジで結婚した、レカ（26 歳）という女性の家庭を訪問した。

彼女はイスラム教徒の貧しい家庭で生まれ育ち、10 代後半で売春宿に売られた。レスキュー・ファンデーションに救出され、リハビリを受けた後、縁談がまとまる。相手はジャイナ教という異教徒の男性だった。

ジャイナ教は、仏教の開祖であるお釈迦様と同時代のマハーヴィーラを祖師と仰ぎ、不殺生の誓戒を厳守するなど、徹底した苦行と禁欲主義をもって知られる宗教だ。インド文化の諸方面に影響を与え続け、現在もそれほど多くはないものの、無視できない信徒数を保っており、とくにムンバイには信徒のコミュニティが多い。

昨今のインドでは、男女の人口比の格差が大き

な社会問題になっている。

ヒンドゥー教やジャイナ教などは、教義上、婚姻後に嫡男を生み育てることが絶対義務とされている。加えて、ダウリー（花嫁の持参金制度）があるため、多くの親が女子の誕生を望まない。そのため、20年ほど前から妊娠中の性別診断で胎児が女兒とわかると、妊娠中絶してしまう家庭が相次いだ。結果、地域によっては、女性7に対し、男性10といった人口比になっているのだ。つまり、結婚相手に恵まれない男性が多数に上るのである。

経済的に豊かな家庭であれば縁談には困らない。問題は中産階級層や貧困層の男性だ。

レスキュー・ファンデーションには、こういった男性たちからの結婚の申し込みが殺到している。いわゆる売り手市場であるため、数多の男性の中から人間性や経済面などの諸条件をクリアした人物を選ぶことができる。要するに、かなりの確率で良縁に恵まれるというわけだ。

背景には、女兒の妊娠中絶、つまり女性の地位の低さがある。それを考えれば確かに複雑な心境であり、手放しでは喜びきれないところもある。だが、現実として、女性たちが良縁に恵まれ、婚姻によって新たな人生を構築できるという点においては、やはり喜ばしいことだ。

レスキュー・ファンデーションは、結婚相手とその家族に、いくつかの条件を提示している。中でももっとも重要視されているのは、「過去を話題にしない」「宗教を話題にしない」の2点である。

もちろん、相手の男性や家族の人間性、経済環境も重視する。反対に宗教や民族、カーストは問題にしない。この点にこだわると、大半の女性のカーストが低位にあるため、縁談をまとめる上で支障となるからだ。

イスラム教徒のレカにとって、ジャイナ教徒としての生活は異質のものだ。言語も変わり、食事でも肉食から完全菜食主義へ。神への祈りのスタイルも全く違う。それでも彼女は、ジャイナ教徒の家庭に染まるべく、懸命に努力した。

「レカはすっかりジャイナ教徒の家の嫁です。私たちの言葉もすっかり覚えたし、ジャイナの料理も上手に作れるようになりました。何より、私のことをとても大切にしてくれます。足が悪くて歩けないので、いつも世話をしてくれるんですよ。本当に私は幸せです」

年老いたお姑さんの言葉だ。

レカは2歳の男の子の母親だ。そしてお腹には第2子が宿っている。確かな幸せがそこにあった。

彼女に幸福な人生がもたらされたのは、レスキュー・ファンデーションの活動によるものだ。そして、ラリグラスの皆さまには、彼らの活動の一助を担い続けていただいている。

結婚式の会場に貼られた横断幕は、そんな陰日向なく真の支援を継続してくださる当会の関係者の皆さまに対する、レスキュー・ファンデーションの感謝の意であると思う。改めて深く感謝申し上げます。



ラリグラスにも招待状が届いていましたが残念ながら欠席。でも、大きなウェルカムの横断幕で迎えてくれました。



施設の女の子達も大興奮。「次は私がお嫁に行くわ！」  
「いいえ、私が先よ！」と、良縁を心待ちにしています。

## 現地報告：レスキュー・ファンデーション

- 『レスキュー・ファンデーション・ブライダル基金』にご協力いただいたみなさま（敬称略）  
（2010年10月～2011年3月）

石原正行 稲垣すみ子 大谷享 大野国貢  
嘉門崇生 後藤秀夫 佐藤光男 鈴木樹代子  
鈴木祐子 平井英津子 松永一夫 元田智子  
吉田久美子

計 305,000 円

この場をお借りして、温かいご支援に心より感謝いたします。

### 【寄付の方法】

1口 1000円

#### ○郵便振替の場合

口座番号：00100-5-713661

加入者名：トクヒ）ラリグラスジャパン

※郵便振替の場合は、通信欄に「ブライダル基金」とご記載ください。

#### ○銀行振込の場合

三菱東京UFJ銀行新宿中央支店

口座番号：普通預金 4850061

口座名義：ラリグラスジャパン ヨシダクミコ

※銀行振替の場合は、メール等で「ブライダル基金」への寄付とご連絡ください。

## 記録映画とDVD制作

●今回の訪問は、恒例の調査や現地団体とのミーティングに加え、ネパールとインドの人身売買をテーマとした記録映画制作のためのロケを兼ねていた。

ご存じのこととは思うが、筆者の生業は著述業である。また、時々、テレビ報道にも携わり、これまでにNHKやTBSなどでドキュメンタリー番組を制作してきた。

映像を制作する際、撮影フィルムは膨大な量に上る。それらの中からストーリー展開上、必要な部分を抽出し、1本の作品に仕上げるわけだが、その結果、たくさんの公開されることのない映像が残されることになる。

取材者や撮影者というものは、対象物のすべてを“必要な素材”として拾い上げる。つまり、未公開映像の中には、このまま眠らせておくにはあまりに惜しい素材が数々、存在するというわけだ。

そういった事実を背景に、昨年末、テレビドキュメンタリー制作をともに担っていただいた制作会社より、これらのアーカイブスを活用し、DVDを制作してはどうかとの打診をいただいた。そこで理事会にて審議し、記録映画とDVDの制作を決定した次第である。

●映画・DVD制作決定の背景には、レスキュー・ファンデーションからの次なるオファーも影響している。それは、昨年5月に開催した来日講演の時のことだ。トリベニ・アチャルヤさんが、こんな言葉をかけてくれたのである。

「私たちと何人かの警察幹部は今、とてもいい関係にあります。だからもし、次にレスキューのシーンを撮影する時は、これまでのような隠しカメラではなく、手持ちのカメラで入ってもらえるようアレンジできると思います」

トリベニさんの前職はジャーナリストだ。現役時代は、女性であるにも関わらず、テロや殺人事件をはじめ、人身売買犯罪の告発などで名を馳せた優秀なジャーナリストだった。だが、夫でレスキュー・ファンデーション創設者のバルクリシュナ氏が不幸な死を遂げたため、職を辞してレスキュー・ファンデーションを引き継いだことはご存じのとおりだ。

現在、トリベニさんはNGOの活動に専念している。だが、彼女のジャーナリスト魂は今も確かに生きている。

「いつか人身売買犯罪やここで暮らす女の子たちをテーマに本を書こうと思っている」と話してくれたことがあるが、その言葉こそが彼女が未だジャーナリストであることの証だ。

そんなトリベニさんだからこそ、同業者である筆者らの想いを理解してくれるのだと思う。

筆者は、2007年と2008年に売春宿に潜入し、レスキューシーンの撮影を試みた。だが、それらは隠しカメラによるスパイ撮影であり、汚職警察官による邪魔もあって困難を極めるものだった。番組化に耐えられるだけの映像はおさめられたものの、「きちんと撮影し、実情をより確実に表現したい」との想いはずっとあり続けた。そんな思いをトリベニさんは汲んでくれたのだと思う。

もちろん、それだけが理由ではない。何より彼女はメディアの持つ力に期待しているのだ。

活字、映像などのメディアによる情報の波及効果は大きい。レスキュー・ファンデーションの活動が年々、広がりを見せてきたのも、各国のドナーの働きかけにより、それぞれの国のメディアが動き、PRに努めてくれたことも理由だ。筆者もまた、メディアに携わる者のひとりとして、日本におけるPR活動に貢献すべき方法を模索してきたつもりだ。

ラリグラスは、各々の能力をご提供いただくことで成り立っている。例えば、当会のホームページやパンフレットの作成、経理の管理や障害児教育に関するノウハウの提供など、いずれもそれを得意とする（もしくはプロ）の方々によって担われてきた。“自分にできることを可能な範囲でやる”というのが、ラリグラスの活動の特性だ。筆者についていえば、メディアを活用することに他ならない。

「マイティ・ネパールやレスキュー・ファンデーションの活動をより広く、より効果的にアピールする」

記録映画とDVD制作の主目的がここにあることを、レスキュー・ファンデーションは深く理解してくれている。だからこそ、「レスキューシーン

の撮影アレンジ」などという困難な仕事をオファーしてくれたのだ。

だが、いくら警察との関係性が良好であったとしても、売春宿内部の撮影に危険が伴うことに代わりはない。内偵員は顔が割れてしまえば、その後のミッションに悪影響が及ぶ。最悪の場合、そのエリアに二度と足を踏み入れることができなくなる。撮影隊が同行すれば、救出ミッションがいつも以上に難しいものとなるだろう。

よって、売春宿側に刺激を与えることのないよう、筆者とカメラマンはレスキュー・ファンデーションで働くネパール人スタッフに変装し、身につけるもの、言葉、歩き方など、できるだけ現地のスタイルを真似るなどして現場に溶け込む努力を行った。結果、撮影隊の素性がバレるという最悪の事態を招くことはなかったが、それでもこの試みは実に困難なものであった。

●レスキューシーンの撮影は、プーネのブダワルペットとデリーのG.B.ロードで行った。どちらのエリアにもたくさんの売春宿が軒を連ねている。だが、そのすべてが同じ性質のものではない。大きく分けるとすれば、“比較的、監視が緩く踏み込みやすい店”と、“非常に監視の目が厳しく潜入に多大な危険が伴う店”に分類できる。

撮影はもちろん後者で行った。なぜなら、監視が厳しい店にこそ、救出を待つ少女たちが存在するからだ。

レスキュー・ファンデーションは、すべての女性を救出したいと考えている。だが、数人のスタッフでそれを実現することは不可能だ。ならば、どのような店をターゲットに救出活動を行っているのかといえば、本人から救出してほしいと要請があった店である。

救出を願う者の多くは、マイナー（18歳未満）の少女たちだ。だが、低年齢のセックスワーカーは、売春宿側にとって商品価値が高い。奪われれば大きな損失であることから、監視の目がより厳しくなるというわけであり、今回の救出ミッションは、まさにそんな店を標的に行われた。

プーネ、デリーともに、救出活動は難航した。とくにデリーでは、マフィアや悪徳政治家の力が働き、つい先日も店側と揉めた客の殺害事件が発生した、最も危険な売春宿がターゲットであったため、1分1秒を争うミッションとなった。それでも、最終的に任務は大成功。プーネで4名、デ

リーで9名を救出し、とくにデリーはこれまでで5本の指に数えられるほどの成功を収めた。

●リスクを冒してでも撮影の機会を与えてくれた理由は、他でもない、レスキュー・ファンデーションの活動を広くPRしてほしいという願いがある。そんな彼らの想いを受け止め、意義ある作品に仕上げなくてはならないと思っている。その初めの一步であるロケでは、デリーの売春宿の内部の様子など、世界初となる映像も収めることができた。レスキューが大成功であったのは、前述のとおりである。

一言でレスキューといっても、救出の瞬間を迎えるまでに、レスキュー・ファンデーションが担う仕事量は膨大だ。プーネでは2カ月、デリーでは4カ月間の内偵を行い、いよいよ踏み込めるという段となっても、今度は警察との折衝に多大な労力を費やされる。

撮影隊も、数日間、スタッフとともに張り込みを続けた。深夜や早朝に及ぶ日もあったが、空腹や睡魔などスタッフらはものともしない。

すべてのアレンジが整い、「よし、これで踏み込めるぞ!」となったところで、警察に送り込まれたスパイから情報が漏れて中止となった日もあった。翌日あるいは数日（長い時には数週間）を空けて、再度挑戦するも再び失敗に終わる。改めて内偵を行い、再再度チャレンジでやっと成功の運びとなったのだった。

忍耐と鋭敏な嗅覚、そして洞察力を要する本当に過酷な職務であると改めて感じた。筆者らは、撮影が終了すればそれで終わりだ。だが、現場のスタッフは、このような過酷なミッションを365日、繰り返しているのである。

そんな、被害者救出に奔走するレスキュー・ファンデーションのスタッフたちの活躍、そしてインドの性産業の実情を、記録映画を通して皆さまにお伝えしたいと思う。

●記録映画とDVDの制作に関しては、当会の活動趣旨にご賛同いただき、現地団体とともに後押ししたいと考えてくださる専門家の方々にご協力いただくことになっている。岩波映像時代から数々のすばらしい作品を生み出されてきた佐藤圭司氏は、柿木カメラマンの大先輩だ。また、これまでのテレビドキュメンタリーで編集を担当してくれた青木亮氏にも協力をお願いした。ネパール語、

インド語の翻訳には、ナビン・サッキヤさん、ミナ・サッキヤさん、ラジェンドラ・サッキヤさんのご協力を仰ぐことになっている。ネパールやインドの方はじめ、外国の方々にも広くご覧いただけるよう、DVD は英語版も制作する予定だ。英訳は当会のアドバイザーである三原一夫氏にお引き受けいただいた。また、映像のデジタイズ等にかかるテクニカル分野では、同じくアドバイザーの新倉元彦氏に担っていただいている。他、たくさんの方々のラリグラス関係者の方々が、このプロジェクトに関わってくださっている。

公開は来春を予定している。DVD も同時期に発売予定だ。どうぞご期待いただきたい。

尚、DVD の売上は全額、現地への支援金に充てることとしている。少し気が早いですが、多くの皆さまにご購入いただければと願っている。

ネパール障がい者女性協会（NDWS）

●NDWS の概要と支援の経過報告

ネパール障がい者女性協会（Nepal Disabled Women's Society: 以下 NDWS）は、1994 年、障がいを持つ女性たちが中心となって立ち上げた組織である。設立当初は、首都カトマンズから車で 40 分ほどのラリトプール郡ゴダワリという地域に住む障がいを持つ女性に対する職業訓練などを行っていたが、現在は同地域の障がいを持つ子どもたちに焦点を当て、トレーニング・教育・リハビリテーション・アウェアネス活動などのプログラムを実施している。

また、地道な活動を続けた結果、地域での知名度も向上し、ゴダワリ近辺の地域の障がい児・者支援の要請が地域住民から多く寄せられるようになってきた。これに対し、NDWS は政府と協力したプログラムを昨年より実施している。

NDWS の主な活動は以下の 3 つに大きく分けられる。

- ① 障がい児・その保護者に対するセミナーやトレーニングの実施
- ② CBR プログラム（地域中心型リハビリテーション・プログラム）の実施
- ③ デイケアセンターの運営

ここ数年はデイケアセンターの運営に重点を置いてきたが、施設の設備やデイケアセンターの活動内容が充実してきたこと、ゴダワリ周辺の主に山間部からの支援要請が増えてきたこと、ネパール国内における障がい児・者の社会参加の潮流が強まってきたことなどにより、近年は地域住民へのアウェアネス・プログラムや社会参加のための活動にも比重を置いている。ラリグラス・ジャパンはNDWSに対して、これらの活動運営費の支援、障がいに関する情報提供、助成金の申請代行、文房具や教材の提供などを行っている。NDWSが支援の対象としている地域は、ゴダワリにある 8 つの VDC<sup>1</sup>である。

●CBR プログラム関連の活動

前々回のレポートでネパール政府が制度化した障がい者手帳についてご報告した。障がいの程度による 4 種類の障がい者手帳を発行し、登録す

ば程度に応じて月々 300 ルピーから 1,000 ルピーの補助金が支給されるのだが、各地方自治体は障がい児・者を特定する調査・診断を行うノウハウを持ち合わせていない。そのため、障がい児・者支援分野で経験のある各地域の CBR がその手続きを任されていることが多く、ゴダワリ地域では NDWS がその役割を果たしている。

今年 1 月には新たに 5 つの VDC（ゴダワリ、バディケル、ジャルワラシ、ゴダムチョール、ビシヤンク ナラヤン）において障がい児・者の調査を行い、障がい者手帳発行の手続きを支援した。これに合わせて、各地域で障がいと手帳に関するワークショップも開催し、多くの関係者が参加した。

障がい者手帳の制度は教育・医療・福祉の全てのサービスを提供する基準となる重要なデータである。日本でもこの手帳を基に統計や各種サービスが提供されている。ネパール政府は 2008 年に政令を發表してこの制度を開始しているが、NDWS のスタッフによると、調査を実施できる団体が全ての地域にいないことや、山間部やへき地などで調査を実施することが難しいことが課題となっているようだ。

前々回のレポートで、昨年の 4 月にネパール政府から 20 万ルピーを得て、山間部などこれまで支援が行き届いていなかった地域での障がい児・者の調査と CBR ワークショップを実施したことをご報告した。今年も同じ予算を得ることができたため、上述した手帳発行とも合わせて新たな VDC での調査を行うことを予定している。



ワークショップの様子。郡の関係者も参加した。

<sup>1</sup> 自治体単位のひとつである村落開発委員会のこと。

また、今年2月に、デイケアセンターにて「ヘルスキャンプ」を開始した。「ヘルスキャンプ」は、デイケアセンターに大きな病院から医師や看護師を呼び、障がいを持つ子どもたちの健康診断や障がいの状態をチェックしてもらうプログラムである。NDWSでは毎年開催するようにしているが、今年はペアレンツ・アソシエーションが主体となって開催された。費用も「Nari Shakti Saving & Credit Cooperative Ltd.」という地域の信用協同組合から支援を得て行うことができた。

ペアレンツ・アソシエーションは東日本大震災後にミーティングを開催し、「日本が大変な時に日本からの支援にばかり頼ってられない。私たちでもできることがあればがんばりたい」と、デイケアセンターでの家族ボランティア活動や運営資金集めなどに力を入れてくれるようになっていた。今回、海外の支援団体ではなく地域の団体から支援を受けることができたのはNDWSの活動が地域で評価を得ている証でもあり、特筆すべき点である。



ヘルスキャンプ。46人の子どもたちが参加した。

NDWSは昨年度に引き続き、(財)ひろしま・祈りの石国際教育交流財団から100万円の助成金を受けて「障がい児を対象としたインクルーシブ教育の促進」プロジェクトを実施している。この助成金プロジェクトの内容は「国内活動報告 助成金」で詳述する。

## ●デイケアセンターの活動

デイケアセンターは2000年より運営が開始された。NDWSの設立当初は、家庭訪問を中心とした障がい児とその家族への支援を行っていたが、家族からデイケアセンター設立の強い要望があり、開設に至った。デイケアセンターは現在午前9時半から午後4時までとなっている。現在通っている子どもは23人で、センターの近隣に住んでいる子どもや障がいが軽く保護者の送迎が可能な子どもを除き、ほとんどの子どもがスクールバスで通っている。

デイケアセンターでは、子どもたちの発達段階や障がいによって3つのクラスを設けている。朝は全体で集まってダンスや体操を行い、その後クラスごとに分かれて発達段階に応じた学習を行う。

昨年よりダンスのクラスを設け、外部から講師を招いて教えてもらうようになった。特に、ダウン症の子どもたちは音楽が好きでダンスが上手であるため、ネパールの伝統的な踊りを覚えて学校での行事ごとや障がい児関連イベントに参加した際に披露できるようになった。

3月21日に開催された「国際ダウン症の日」には、ラリトプール郡でダウン症児を集めたプログラムが開催され、NDWSの子どもたちがこの場でダンスを披露した。ネパールの伝統的なダンスは独特の手の動きとリズム感が特徴である。ダウン症の子どもたちはそれを上手に表現し、また表情も豊かであるため、観客を多いに楽しませてくれる。当日のプログラムも保護者や地域住民など多くの観客の前であるにも関わらず、怖気づくことなく立派にダンスを披露してくれた。



ネパールの伝統ダンスを披露するデイケアセンターの子どもたち

また、高学年や社会性の高い子どもたちに対して洗濯・簡単な裁縫・ガーデニングなどのプログラムも新しく取り入れた。デイケアセンターではこれまでも職業訓練としてキャンドル作りなどを行ってきたが、子どもたちの手だけで作り上げることは難しいために断念した経緯がある。

デイケアセンターに通っている子どもたちは、全員が知的障がいや身体障がいを有しており、自立した生活を送ったり一定の収入を得られるような職業に就いたりすることは難しい。しかしながら、デイケアセンターの受け入れ可能人数も限られており、ある程度年齢が高い子どもたちの今後を考えなければ、新しい子どもたちを受け入れることができなくなってしまう。

そこで、ペアレンツ・アソシエーションとも協議を行い、家庭で生活を送るにしても家族の手伝いや家での仕事を持ち、コミュニティの一員として自立できるようにと上記のような新しいプログラムを取り入れることにしたのである。低学年の子どもたちには、歯磨きや着替えなど身近自立のための活動も日常的に取り入れ、学習や発達段階だけでなく彼らの生活全般を向上させることを視野に入れるようにしている。



ランチの後は毎日歯磨きの練習です。

イベント・その他の活動（2011年10月～2012年3月）

【イベント】

●グローバルフェスタ JAPAN2011

2011年10月1日（土）～2日（日）に日比谷公園で行われたグローバルフェスタ JAPAN2011に参加し、例年通り、食販、物販の両ブースに出展した。

イベント前日まで気温が低い日が続き、天気も心配されたが、当日は、日なたでは暑いくらいの陽気となった。

今年はインド・ネパール&アジアダイニング『カナピナ』の皆さまに全面的にご協力いただき、食販ブースではナン&チキンティッカ、ネパールビールの販売を行った。タンドール（インドなどで使われている窯）を持ち込みその場でナンやチキンを焼くことが売りだったが、なんと隣のココナツカレーのブースもタンドールを持ち込んでおり、初めから苦戦が予想された。『カナピナ』の方からはカレーもやろうとの声をいただいたが、申請外のもの販売することができないため予定通りナン&チキンティッカのみの販売で頑張ることとなった。



調理から販売までこなして下さった『カナピナ』のお2人

ところが予想に反して売れ行きは好調。例年のカレー&ナンは、お昼時と夕方には売れるが他の時間帯には売れにくいという波があった。しかし、今回のチキンはおつまみ感覚で食べられるとあって、時間に関わらず常に行列ができていたという人気ぶりだった。2日間とも、準備していた量で

は足りず、日本橋のお店から何度も追加のチキンを運ぶほどであった。



大人気だった焼きたてチキン

また、ブースが公園の一番端にあり、あまり良いとはいえない位置ではあったが、その分スペースを広く使うことができ、『カナピナ』の皆さまがナンを焼く姿も目立っていた。このナンを焼くパフォーマンスを見ようと足をとめる方が多く、集客に一役買っていた。

物販ブースでは、革製品はもちろん、今年の新商品のビーズボタンのヘアゴムや新しいデザインのコースターが人気だった。現地で仕入れたヘンプのリュック類も完売。レスキュー・ファンデーションの女の子が書いた絵をご購入くださったお客さまもいらっしゃるなど、こちらも例年より好調な売上だった。



所狭しとならぶ毎年人気のフェルト商品

## 国内活動報告

『カナピナ』の皆さまやボランティアの皆さまのおかげで、年最大のイベントを無事に終えることができた。

### ●よこはま国際フェスタ 2011

2011年10月23日(日)に象の鼻パークで開催された「よこはま国際フェスタ 2011」に参加した。前日の22日(土)にも参加する予定だったが、天候が悪く、警報が発令されたため、急きょイベント自体が中止となってしまった。23日の開催も危ぶまれたが、前日とは違って変わって晴天となり、予定通り開催することができた。

食販ブースでは例年通り「カレー&ナン」「カレー&ターメリックライス」「ネパール風ミルクティ・チャー」を、物販ブースでは、ビーズアクセサリーやネパール雑貨を販売した。

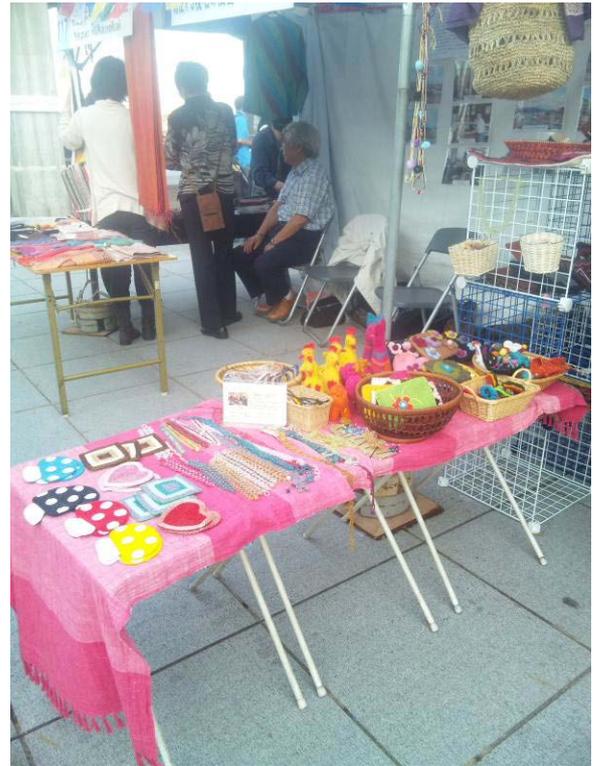
イベントが一日のみの開催となり、すでに仕入れていた食材が余ってしまわないかなどの心配もあったが、2日間のお客さまが1日に集約したかのような来客数で、食販ブースはフル回転、ナンが早々に売り切れ、ライスの炊飯も間に合わず、近くのスーパーでパンを調達して「カレー&パン」を販売するほど大好評だった。



毎年大人気のカレー。

物販ブースにもたくさんの方がお立ち寄りくださり、定番の革ポーチやフェルトポーチ、ビーズボタンのヘアゴム、ヘンプリュックやバッグなど

が人気だった。



横浜ではビーズアクセサリーを中心に販売

各イベントにご参加くださった皆さま、ご来場くださった皆さま、どうもありがとうございました。

2012年度もグローバルフェスタ、よこはま国際フェスタへの参加を予定しております。詳細はホームページに掲載、またメールにてご連絡させていただきますので、皆さまのご協力お待ちしております。

### ●よこはま国際フォーラム 2012

2012年2月12日(日)、JICA横浜で行われた「よこはま国際フォーラム 2012」に参加した。よこはま国際フェスタのセミナー部分が昨年より単独で行われるようになり、今年で2回目の参加となった。

三連休ということで人出が気になるころだったが、同時進行で開催されている5つほどのセミナーはどれもそれなりに人が入っており、当会にも30名定員の会場にぎっしり聴講者の方がいらしてくださり、立ち見も出るなど昨年を上回る盛況だった。去年同様に学生の参加者も多く、関心の高さがうかがえた。

### 【その他】

#### ●印刷作業

2011年11月27日(日)に、『ラリグラス・ジャパン 2011年秋リポート』の印刷作業を、東京ボランティア・市民活動センターにて行った。

ご協力くださったボランティアの皆さまありがとうございました。



印刷作業の様子

#### ●委託販売

ラリグラス・ジャパンでは、当会が所有する商品(ネパール雑貨やホスピスの女性が制作したビーズ製品)をイベントで販売している。しかし、イベントの出展は東京近郊に限られてしまうため、近年は遠方にお住まいの方にもご協力いただきやすい委託販売に力を入れている。この半年の間にも多くの方々にご協力いただいた。

柿田志織様はじめ横浜雙葉高校の皆さまには、総合学習を通して当会の活動にご賛同いただき、昨年に引き続き学園祭での委託販売にご協力いただいた。また、メンバーの皆さまによる手作りお菓子やミサンガの売り上げもご寄付いただいた。

宮城学院女子大学国際支援活動 Triangle の赤星彩華様ならびにメンバーの皆さまにも、去年同様、学園祭にて委託販売にご協力いただいた。

石原正行様には、2011年10月、高知大学医学部にて当会代表・長谷川を講師とした講演会を企画していただき、その折、会場での販売をアレンジいただくなど、ご尽力いただいた。

2008年のスタディツアー参加者である岡本芽衣子様には、在学されている看護学校にて勉強会を開き、その際ビーズ製品を販売いただいた。ま

た勉強会に参加された有志の皆様と文化祭に出展し、委託販売にご協力くださった。先生方からのご要望もあり文化祭後に追加で発注いただくほど、売り上げにご協力くださった。

Fair trade For Christmasの赤坂真未様には2回にわたってイベントでの委託販売にご協力いただいた。

福岡西新公民館の古賀盟子様には、今年も子ども会のお母様方や子どもたちと文化祭での販売にご協力いただいた。大盛況だったとのことで、特にフェルトのマスコットが人気だったようだ。現在新商品として、フェルトで作ったマグネットをホスピスの女性たちに発注しているので、そちらも楽しみにしていただきたい。また、古賀様には、小学生の男の子がペットボトルいっぱい集めてくれた募金を合わせてご寄付いただいた。



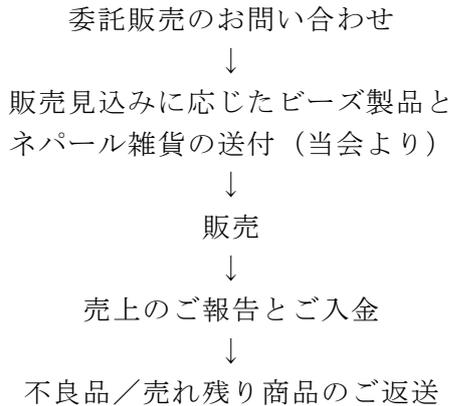
古賀盟子さまと子ども会のみなさま

ビーズ製品の制作は、ホスピスの女性たちの唯一の現金収入の手段であるとともに、生活にハリをもたらす上でも重要な意味を持つものである。このため、一定量の発注を保つことが重要であるが、当会が出展する首都圏でのイベントだけでは販売量に限りがあるのが現状だ。そこで委託販売の拡販に努めてきたという経緯がある。商品に関してもビーズ製品だけでは限界があるため、今年は上記のマグネットなど、フェルト小物をホスピスの女性たちに制作依頼している。

このように大変意義のある委託販売にご協力いただいた皆さまには心よりお礼を申し上げたい。そして引き続き皆さまのご協力をお願いしたい。

【委託販売ご協力のお願い】

○委託販売の流れ



新しくデイケアセンターに入ったサリナ

○価格や売上金について

販売価格は当会のイベント時の価格でお願いしています（価格がお客様層と合わない場合等はお相談ください）。

送品、返品にかかる送料は当会が負担いたしますが、ご入金の際にかかる手数料はご負担願います。また、売上金は全額当会にご入金をお願いいたします。

またご希望の方には当会のパンフレット、パネルを同梱させていただきます。

ほかにもご不明な点がございましたら、お気軽にお問い合わせください。

皆さまのご協力、心よりお待ちしております。

●（財）ひろしま・祈りの石国際教育交流財団からの助成金

2011 年度も、「障がい児を対象としたインクルーシブ教育の促進」プロジェクトに対して 100 万円の助成金を受けることができた。このプロジェクトは、NDWS に登録している子どもで、すでに通常学校に通っているが学校で困難を抱えている軽度の障がい児や、通常学校に通うことがまだできていない子どもたちに対し、必要な支援を提供することを目的としている。

「NDWS」の項目でご報告した通り、昨年 4 月に実施された軽度障がい児の調査により学校に通えていないことが明らかになった子どもたちのうち、1 名は地域の学校に通うことができるようになった。また、3 名はデイケアセンターに通い始めている。

このプロジェクトでは、デイケアセンターに通う子どもたちと通常学校の子どもの交流プログラムも実施している。1 月から 3 月にかけては、2 回の交流プログラムと 2 回の学生向け障がい理解講座を開催した。

2 月 23 日に実施した交流プログラムは、Bishankhu Narayan School で開催された。この学校はデイケアセンターの近くにある学校で、徒歩圏内であるため、デイケアセンターの子どもたちが学校を訪問した。まだ寒い季節であったため、デイケアセンターの子どもたちは欠席者も多かったが、8 人が交流学习に参加した。ナーサリークラス（就学前クラス）の子どもたち 13 人と一緒にダンスを踊ったり歌を歌ったりした。同時に、教員と上級生向けの障がい理解講座を開催した。約 30 名の参加者に対し、障がいの種類や原因などについて写真を活用しながら説明した。

3 月 1 日に実施した交流プログラムは、Kitini Secondary School で開催された。Kitini Secondary School はこれまでも交流学习に協力してくれた学校である。今回は、デイケアセンターの子どもたちが学校を訪問し、1 年生のクラスに入って読み書きの勉強やダンスなどの活動と一緒にいった。デイケアセンターからは 10 人の子どもたちと 2 人の教師が、Kitini Secondary School からは 15 人の子どもたちと 2 人の教師が参加した。この学校には軽度の障がい児が通っており、デイケアセンターの教師はその障がい児への対応方法なども教授した。また、同じ日に NDWS の啓発活動などを担当しているスタッフが同校の 60 人の上級生（若干名の教員も含む）を対象に障がい理解

## 国内活動報告

講座を開催した。学校の生徒でも理解しやすいように、写真を多く用いたパワーポイントを作成し、それを見せながら講義を行った。



Kitini Secondary School での交流の様子。まずは自己紹介から。



上級生向けの障がい理解プログラムの様子。

2011年度の上記プロジェクトは2012年3月をもって一旦終了となったが、今回交流プログラムを行った学校とは今後も定期的に交流していく。また、今年度も同財団よりアウェアネス・プログラムに対する助成金48万円を受けることができた。地域の学校に対する障がい理解プログラムは、参加した生徒や学校の先生からも大変好評であり、学校でのプログラムをきっかけに地域の青年クラブがデイケアセンターを訪問するなどの交流も生まれている。今年度も若者を主な対象として地域へのアウェアネス・プログラムを積極的に実施していく予定である。

## ●一般財団法人日本国際協力システム（JICS） NGO 支援事業

### 『HIV/AIDS 検査・治療・ケアの拡充に向けて』

標題のプロプロジェクトに関して、「一般財団法人日本国際協力システム NGO 支援事業」より、70万円を配分していただくことができた。このプロジェクトは、レスキュー・ファンデーションが運営するリカバリー・ケア・センター（RCC）のHIV/AIDSの検査・治療・ケア体制をさらに充実させるプロジェクトである。

RCCは、2009年度国際ボランティア貯金補助金の配分を受けて、マハラシュトラ州ボイサル市に建設された。RCC周辺には、HIV感染の検査やAIDS治療を行える大きな病院がないため、住民からも検査や治療の要望が多数寄せられている。しかし、当初の予想よりも多くの住民からの検査の要望が寄せられ、雇用しているスタッフだけでは応じきれない状況にあった。

そのため、本プロジェクトでは、さらに医師・臨床心理士・看護師・ケアワーカーを雇用し、近隣の住民に対する検査・治療・ケア体制を充実させる取り組みを開始している。

## 参加者リスト

### 会員・寄付者リスト

(敬称略)

#### 【会員】

2011年9月から2012年3月の間に会員（継続も含む）になってくださった皆さまのお名前

##### 《正会員》

秋山佳子 有田千枝 石川重美 上原翔子 岡佐保理 門垣裕子 亀尾麻彩子 須賀香奈 下窄あゆみ  
高柳ユミ 中嶋野香 中野陽子 新倉元彦 長谷川まり子 林亜紀子 三原一夫 武藤禎

##### 《里親会員》

有田千枝 石川重美 岡佐保理

##### 《里親賛助会員》

阿部真里子 石原正行 伊藤芳樹 板阪淳子 今中正次 上中美穂 宇田川江美 宇田川純子 宇野ゆかり  
大黒やより 大田多恵 大西和江 岡田桂子 岡野孝博 奥井眞佐子 小山田基香 川島由佳 木村良枝  
工藤節子 國森佳子 畔柳茂樹 櫻井るり香 渋谷修 鈴木樹代子 宗祥子 反町絵理 高橋国和  
高橋多美子 高橋奈美江 瀧口修薫 田中易子 徳山明志 轟木元枝 西部徹 西堀喜則 野口みどり  
南風本いづみ 林泉 林省吾 林和夫 平井英津子 平野善之 二神成尊（仏教子ども救援基金）細村嘉一  
前澤洋子 丸山竹士郎 水上直樹 三ツ木知昭 宮崎宜典 宮田泰司 武藤裕子 森谷里美 山田しづ子  
吉田紫磨子

##### 《一般賛助会員》

青山由香 秋山洋子 石川由紀 石渡裕康 稲垣すみ子 稲葉資郎 今村久美子 内田修弘 江戸利恵  
近江京子 近江靖史朗 大成勝代 大野国貢 大西朋子 岡部陵佳 越久幸子 桶谷有紀 鏡島元昭  
柿木喜久男 笠原礼子 金田敦子 菊田茉莉 木藤陽子 木村和人 後藤奈緒子 駒井咲久良 坂本淳子  
佐々木ひろみ 渋谷優子 松竹麻沙美 鈴木信明 鈴木祐子 空美加 田邊暢子 千葉幸子 塚野多木子  
筒井知佐 土居裕見子 富成玉江 長江さをり 永野ふじ子 名田文子 西野章男 河朱美 長谷川隆三  
場真紀子 平櫛知行 藤田美奈子 藤音浄明 降幡めぶき 俣野美代子 松岡静枝 松葉道代 松永一夫  
松本聡子 南和泉 宮本崇見 森本恵弥 矢野弘明 結柴依子 湯浅昌義 吉田久美子 米山知得子

##### 《学生会員》

飯野瞳 榎本忠宣 大橋由希 大森恵美 野老まどか 根本りか 矢野正高

##### 《団体会員》

特定非営利活動法人ネットワーク『地球村』

## 参加者リスト

### 【寄付をしてくださった皆さま】

(2011年10月～2012年3月)

アカサカマミ 有浦紀美子 石岡靖一 石原正行 伊藤明美 稲垣すみ子 稲葉資郎 今井瑞美  
宇田川江美 近江京子 大成勝代 大谷享 大野国貢 岡千景 岡野孝博 岡部陵佳 小野寺和彦  
鏡島元昭 嘉門崇生 川上洋子 川口朋子 カワムラカズエ キユウナナオミ 國森佳子 黒柳節子  
小手川弘子 後藤秀夫 小林幸子 コバヤシノブコ 小森忠良 コンドウシンジ 坂谷内勝明  
サトウトシカズ 佐藤光男 篠原マリ 鈴木樹代子 鈴木重男 鈴木祐子 スギタヤスコ 谷川日康  
津富宏 轟木元枝 友田勝也 友田かな代 中野陽子 名田文子 ニガキサトシ 西部徹 西堀喜則  
丹羽千尋 秦笑子 平井英津子 フクイイズミ 増田澄恵 松岡静枝 松澤大輔 松永一夫 松本聡子  
丸山竹士郎 三谷理 三橋久子 宮田泰司 武藤禎 元田智子 山口泰正 矢野弘明 横田眞二郎  
吉田久美子 ヨシダシン 渡辺あすか  
特定非営利活動法人 世界の人々に教育の機会を与える会FACE (福島充)  
メリークリスマス ハッピーニューイヤー 横浜雙葉高校 匿名希望 グローバルフェスタ寄付

### 【書籍購入にご協力いただいた皆さま】

(2011年10月～2012年3月)

篠原かな子 手塚徹 西部徹 秦笑子 山際恵子 国際協力NGOセンター

### 【ボランティアとして活動に参加してくださった皆さま】

(2011年10月～2012年3月)

青山由香 秋山佳子 阿部香澄 石川重美 上原翔子 宇田川江美 宇田川純子 大田多恵 大野国貢  
岡佐保理 岡本高明 柿木喜久男 亀尾麻彩子 須賀香奈 杉本優子 高橋国和 高柳ユミ 徳山明志  
中嶋野香 中道健 新倉元彦 根本りか 長谷川まり子 林亜紀子 三原一夫 武藤禎 細村嘉一  
矢野弘明 矢野正高

### 【活動にご協力くださった皆さま】

(2011年10月～2012年3月)

インド・ネパール&アジアダイニング『カナピナ』 株式会社光文社 ジャムシステム株式会社佐伯義文  
手島綾

## 参加者リスト

### 【理事・役員】

#### 理事

長谷川まり子	代表
秋山佳子	渉外（info メール）担当
石川重美	会計・会員名簿・ホームページ担当
上原翔子	NDWS 担当・各種補助金申請担当
岡佐保理	商品管理・イベント・ビーズプロジェクト担当
亀尾麻彩子	商品管理・イベント・ビーズプロジェクト担当
下窄あゆみ	商品管理・イベント・ビーズプロジェクト担当
須賀香奈	NDWS 担当・里親会員・年間スケジュール管理担当
高柳ユミ	翻訳チーム・渉外（info メール）担当
中嶋野香	会計・渉外（info メール）・各種補助金申請担当
林亜紀子	里親会員・翻訳チーム・各種補助金申請・NDWS 担当

#### 監事

有田千枝      三原一夫

#### 会計監査

門垣裕子

#### 評議委員

高橋国和      新倉元彦

※本誌記事および画像の無断転用を禁じます。